



あかねくも  
茜雲のように輝いて

津嘉山澄 94年の歩み

津嘉山 澄

あかねぐも  
茜雲のように輝いて



津嘉山澄 94年の歩み



津嘉山 澄 94才

## 「母の自分史」を発行するにあたって

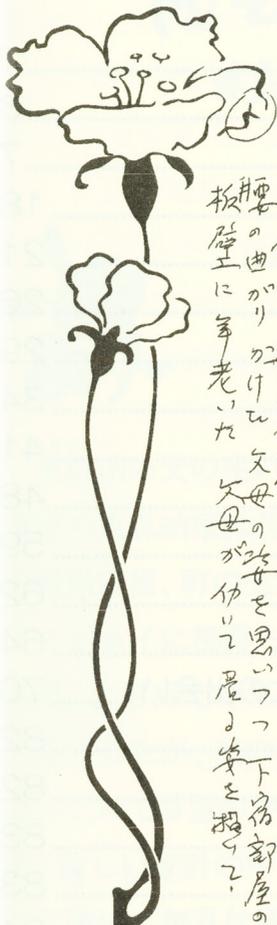
長男 津嘉山 薫

花が咲きやがて散っていくように、人も生まれ、そしてやがてこの世を去っていく。これは自然の営みであり、摂理でもある。しかし、生まれ、そして去っていくという営みは同じでも、一人ひとりの人生の中味は、みんな違っている。それぞれの生き方には、それぞれの深い意味が込められている。だから、散った花の後に実を結び、種を宿すように、その深い意味を心の遺産として宿し、次の世代に引き継いでいくことはとても大切なことだと思う。

94年間という長い年月を歩み続けて来た母の足跡の深い意味を「よき嗣業<sup>ゆずり</sup>」として僕たち子供が受け継ぎ、更に孫とひ孫たちへと伝えていきたいと願う。母は明治から大正、昭和そして平成へと4つもの激動の時代を、一気に駆け抜けてきた人だけに、かけがえのない歴史の生き証人でもある。また、その心の遍歴も僕たちにとって教訓に満ちたものであり、母の残してくれたすばらしい心の遺産の一つである。

母と直接語ることができなかった孫、ひ孫たちそしてその連れ合いが、この「母の自分史」を通して少しでもその足跡の持つ意味を知ることができたら、母にとってこれ以上にうれしいことはないに違いない。

終わりに、母を今日にいたるまで導いて下さった神に深く感謝すると共に、この「母の自分史」を発行するために大変な苦勞をしてくれた重博、めぐみ夫婦に心からの感謝を捧げたい。



自伝史

津嘉山 澄

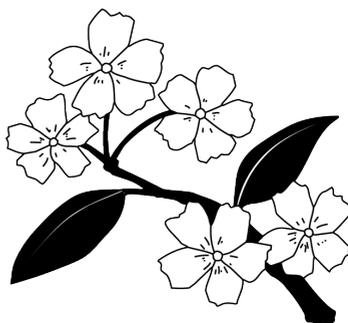
父のこと  
東恩納の父の生ひ立ちから書しことにしまし  
しう。和の實家の種本恩納の父は土佐の士族で  
山川に住んでおられた。屋敷置屋以後、和の士族は  
丁長しとなり、佐敷村のトールハルヤードイに在り、  
典農業をなさることにたりし。長男が攻め、  
次男は、  
たごのい、体格は父親と共におもむきよくて、  
和の文三男盛は、父は和に、勉強が好きだ。  
ので、和の理の神経、早立、中学校に入れ、  
合算しい家計の中、父も、兄も、  
い、この、毎月仕送りして、  
腰の曲がりかけ、  
板壁に年老いた、  
父母が、  
伊り、  
下、  
安を、

本人直筆

# 目次

父のこと	1
誕生	5
病弱な幼少時代	6
女学校時代	15
進学	18
活水女学院	19
婦人伝道師	22
結婚	25
闘病生活	30
県庁婦人指導員	36
疎開	42
天皇拝謁	51
帰郷	53
民政府時代、婦人会活動	56
セブンスデー・アドベンチスト 教会との出会い	60

S D A 教会婦人伝道師として	70
首里教会	70
佐敷教会	71
石川教会	72
北部伝道	72
教育、医療伝道	76
八重山伝道	78
引退と老人会組織	86
つれづれなるままに	92
— 人生の秋に — 「最上のわざ」	95



あかねぐも

# 茜雲のように輝いて

津嘉山澄 94年の歩み



## 父のこと

.....

ひがおんな

東恩納の父の生い立ち

から書くことにしましょう。私の実家の東恩納家は首里の士族で山川に住んでいました。廃藩置県以後、町の生活はできなくなり、佐敷村のトーバルヤードウイに都落ちして、農業をするようになりました。長男、次男はたくましい体格で、父親とともに農業をしておりましたが、私の父三男、せいかく盛格は体は細いが勉強が好きだったので首里の沖縄県立第一中学校に入れてもらいました。貧しい家計の中



父、東恩納盛格 79才  
1957年3月

から、祖父母や兄弟たちが畑で汗水流して働いて毎月仕送りしてくれるのでした。腰の曲がりかけた祖父母の姿を思いつつ下宿部屋の板壁に年老いた祖父母が働いている姿を描いて、感謝しながら勉強していたそうです。

ところが、3年生の中頃、長男、次男が相次いで急死したので、せっかく県立高の難関を突破し、勉強に励んでいた父は、家に呼び戻され、農業を手伝わされました。父は祖父母と一緒に

にしばらくは慣れない農業を手伝っておりましたが燃える向学心をどうしても抑えることができず、19歳の時、とうとう家を飛び出して那覇に出ました。

頼る人もなく、まず何か仕事を見つけようと思って、当時の繁華街、大門（ウフジョウ）前をぶらついていました。

そこで目についたのは、那覇中央郵便局前の局員募集のポスターでした。外国郵便係、1人募集、ただし簡単な英語ができる人との条件。父は、一中の2年生まで、キリスト教の宣教師から英語を学んでいたもので、さっそく応募したら、簡単なテストの後、合格採用されました。



天にも昇る気持ちですぐ田舎に帰り「お父さん、お母さん、僕は官人（公務員のこと）になるんだよ。月給も貰えるんだよ。明日から出勤せよとのことだからすぐ行くよ」と身の回りの物を取り揃えて出発しました。

祖父母は助け手を失ってがっかりはしましたが、三郎小<sup>グッー</sup>（三男坊の父のこと）が官人になったら、金も送ってくれるそうなどさびしい中にも胸を躍らせながら、送り出しました。

部落の人々もみなびっくりしたそうです。公務員になれるということは、その頃はとても名誉なことだったのです。まず下宿先を見つけねばなりません。見るもの聞くものすべてが珍しく好奇心に満ちた父は少しウーマク（わんぱく）だったので、どうせ住むなら毎日美人が見えるところがいいと思って、

辻（遊郭）の繁華街に宿を借りて郵便局に通いはじめたそうです。父の上司である課長さんは長野の方で、メソジストのクリスチャンでした。妻子は長野に置いての単身赴任で、広い官舎に1人住まいでした。

お前の宿はどこかと聞かれ、正直に答えたら、若い青年が今からそんなところに下宿してはよくないとお叱りを受け、課長さんの家に一緒に住むように命令されました。いやいやながら、恐る恐る引っ越しました。もう課長さんの監視付き。

わけも分からないままに、有無を言わず日曜日毎に久米町的那覇メソジスト中央教会に連れて行かれました。生まれて初めての所だし、たくさんの人が集まっていたので恐かったけれども課長さんの側に腰掛けさせられました。

ある日曜日の午後、「あなたのお父さん、お母さんに会いたいから案内せよ」との命令。父はびっくり仰天。「私の家は、田舎のブタ小屋のようなところですから、課長さんを案内することはできません。恥ずかしいです」と答えました。「そんなことはない。どこでも田舎は同じだよ。さあ行こう」

お供をしてでかけたものの、祖父母は立派な課長さんを見てびっくり。方言しか話せないなので、おろおろして、父が通訳していろいろ話したそうです。自分があなたがたの大事な息子さんを預かっているから、心配しないようにと両親を安心させ、お菓子までも下さいました。そして帰る道々「お前は、年老いた貧しい両親を田舎に残しておきながら、よくも遊郭街に家を借りたりして贅沢できたね。親を大事にしない人間はだめだよ。これからは親孝行するんだよ」と懇々と諭されたそうで

す。

またある時は、肥後米1俵（当時の最高級米）を持ってこられて「これとお金をご両親に持っていけ」と押しつけられました。



しかし、とても1人で担げません。思い悩ん

で門の前に立っていたら、同じ部落のおじさんが、棒とモッコを担いで通りかかったので、呼び止め、「トーバルの家まで担いでください。僕には重くて持てないから」と頼みました。「お前、これはジーマー（国産米）ではないか。こんなにどうしたのか」「課長さんに頂いた」「じゃー、俺にも分けてくれるだろうな。ウン、行こう」とおじさんは喜んで運んでくれたのでした。三郎小の家にジーマーが1俵も届いたというので評判になり、見に来る人々も多く、湯飲み茶碗1杯ずつを部落中に分配して喜ばれたそうです。「三郎小は官人になってよかったね」と両親も大満足。1人だけ生き残った息子の出世を楽しみにしておりました。

このようにして、課長さんの立派な人格に毎日触れ、それこそ寝食を共にしつつ教え導かれ、教会にも出入りさせて頂くうち、聖書の教えに深く心を引かれていきました。

神様の<sup>くす</sup>奇しいお導きのうちに初めて神様に自分自身を捧げる決心ができ、21歳の時、洗礼を受け、クリスチャンになったそうです。天地万物をお造りになられた唯一、真の神様がおられることを信じた父は東恩納家の家訓として、キリスト教のみを守りたいと家族と神の前に誓ったのでした。

当時、キリスト教は一般の人々からは「ヤソ」と言われて

非常に嫌われていました。祖先崇拜の盛んな明治時代の沖縄では、特に大変だったことでしょう。両親が活着している間は、仏壇や位牌を置いてくれとのたつての願いを聞いてあげましたが、死後、それらを取り払い焼いてしまいました。親戚は怒りましたが、父は断固として祖先崇拜から離れたのです。



## 誕生



その頃、父はトーバルの土地を売り、那覇市泊に屋敷を買い、かなり大きな家を新築しました。大工は佐敷村の人を頼みました。母は、器量もよくお人好しだったので同郷のよしみもあり、大工を親しくもてなしたため、周りの人が2人の関係を疑い、父に注意した方がいいと告げ口したのです。父は牧師に相談したところ、反省のため1ヶ月位家に帰してはどうかと提案され、乳離れもしない私を家に残して、母は里に帰されました。

1ヶ月経って父が母を迎えに行ったところ「相愛の仲なのに、そのくらいのことで娘を実家に帰すとは何事か」と里の父親は怒り、母を他家にむりやり嫁がせてしまったのでした。父は母を愛していたので、すでに再婚させられていたことに非常に失望落胆。もう2度と結婚はすまいとあきらめておりました。

最初に生まれた子が男だったら、牧師にしよう決めていたらしいのですが、私が女だったので婦人伝道師にする決心を

したそうです。そのために女子の最高学府まで出してあげたい。婚期も遅れるだろうから、少しでも若くするためにと、明治36年12月に生まれたのに翌年の明治37年1月20日に出生届けを出しています。私に対する父の期待はそれほど大きかったにもかかわらず、私は祖母譲りの生まれながらの喘息持ちで病弱、家族じゅうの悩みの種でした。



## 病弱な幼少時代

.....

小さい頃からあの薬、この薬と、ありったけの薬という薬を飲まされ、漢方薬も試しました。にら畑のミミズを煎じて飲まされたり、山原亀を酒つぼに入れて台所の土間に1ヶ月埋め、その汁を飲んだりしましたが、全く効き目はありませんでした。4、5歳の頃だったと思いますが、本土から心霊治癒の方が来て「メー、メー」と声をかけるとどんな病気も治ると評判になりました。クリスチャンである父が、子どもの喘息を治したいばかりに、そんなところにも私を背負って夜そっと出かけてくれたのです。暗い夜道と父の背中のぬくもりが今も忘れられません。もう万策尽き果て、この病は死ぬまで治らないとあきらめました。

父は、私が5歳になるまで1人でおおり、叔母が私の世話をしてくれました。私は祖父母と叔母、父の寵愛を一身に受け、甘やかされて何不自由なく育てられました。しかし、叔母もい

つまでもこの子を見るわけにはいかない。再婚するようにと強く勧めました。父はしかたなく「子どもを可愛がってくれる女性なら、誰でもよい。連れてきなさい」と言い、自分で探すほどの熱意は見せなかったようです。

叔母が近くの店に買い物に行く度に、私を抱きしめて可愛がる子ども好きな女性がいました。その人の父親は県立病院の会計をしていたので、立派な方に違いないと付き合いもせず、ろくろく会いもしないで結婚しました。やっと私にもお母さんと呼べる人が与えられました。継母は私をほんとに可愛がってくれました。

喘息の発作がないときには、すごく元気で勢いにまかせて走ったり遊んだりするとたちまち「ヒーヒー」と呼吸困難が始まる。寝床でちゃんと背中を伸ばして寝られる日は少なく、何かによりかかって発作の止まるまで汗だくだくで一夜を過ごすことが多かったのです。

こんな体なので、いつも大事にされたためか、わがままで、ウーマク（きかんぼう）でした。体は弱く、気だけは強い女の子だったのです。そんな私を母は全く叱りもせず、そのかわり、躰しつけもせず（躰しつけてもきかなかったのでしょうか）、忍耐して優しく見守ってくれました。出来物の母より私にとってはありがたい母でした。

小学校で教えて頂いた、武富セツ先生が「世間の人は継親ままおやを悪く言うが、自分が産んでもいない子を育てる継母は偉い人よ、お母さんを大事にしてあげなさいよ」と言い聞かせてくださいました。また、母は学校の先生を尊敬し、芋、キャベツ、

四季折々の野菜の初物はまず先生の所に持っていかせました。

小学校2年生の時だったと思います。恐ろしい伝染病、腸チフスが流行し、たくさんの人々が死にました。私もそれにかかり、高熱を出しましたが、何とか順調に回復しつつありました。その状態の時が一番大事で完全に回復するまでは、流動食以外の固形物は絶対に与えないように注意されていました。特に子どものことだから、十分監視するよう医者に言われていたそうです。

私はトイレに行った帰り、台所においしそうなお炊き立てのサツマイモがおなべ一杯にあったので誰も見ていないのを幸い、1個食べてしまいました。そこを父に見つけられ、「もうお前は死ぬんだ、大変なことになった」とさんざん叱られ、脅かされました。父もこの子はもうだめかもしれないと覚悟し、生みの母に1度は会わせておこうと母を呼んだようです。私の枕元で泣いていた母の姿をはっきり覚えています。

幸い九死に一生を得、何ヶ月か後に完全に回復しましたが、高熱のために髪の毛はすっかり抜け落ち、男の子のように丸坊主になってしまいました。それで風呂敷きで頭を巻いて恥ずかしい思いをしながら学校に通ったのでした。

私は小学校の頃から早起きで、家族が寝ているうちに起きだし、いろいろな遊びをしました。朝露に濡れたカンターグワの花が道にポトリポトリと落ちていました。がくを下にしてピンク色の花びらと細いめしべがゆらゆらと朝の冷たい空気に揺れているのです。子どもながらその美しさに魅せられて、いっぱいいっぱい集めて家に持って帰りました。

「ニチンクワラン、ヤチンクワラン（煮ても焼いても食えない）、こんなものどうするんだ！」とおじいさんに叱られながら、毎朝飽きもせず集めてきました。おじいさんに叱られた事と言えば、もう1つの子どもの楽しみがありました。マガヤの茎を集め根をしゃぶるとほのかに甘い汁が出るのです。これもまたたくさん取って持ち歩き、庭を散らかして叱られました。



桑の実、グミの実の熟れる頃は、朝から忙しい。起きるや否や家を飛び出すので、おじいさんに、「お前は学校のハシルアキヤー（戸を開ける係）なのか」と笑われたものです。野原で摘んだニンブトカー（すべりひゆ）をおばあさんに持って行ったら、「この子は食べられる野草を1度教えたら、いつも持ってくるよ。賢い子だ」とほめられました。

野の花や草を集めてくる癖は、90歳越えてもいまだに直らずエプロンのポケットいっぱい取ってきてはお祖父さんならぬ娘にしかられています。

夕方になると、ユサンディ・マチグワー（夕市）に自分の畑で作った葱やニラなどを売りに行き、儲けたお金を日曜学校の献金にしていました。

あの頃の主婦は、1日に2度市場に通って買い物をしまし

た。昼食のために買い、また夕食のためにおかずなど買いに出るのです。豆腐は石垣の上に箱ごとおいてあり、自分でほしいだけ切って、お金を箱に入れる無人販売です。のんびりとした、のどかな光景でした。大きな丸ニンニクの砂糖漬けのにおいがしてきます。私の大好物でそれが欲しさにいつも母のお供をして昼マチグラー（市）に出かけました。

子供たちは、朝早くから道端に集まっておはじき遊びに熱中しました。ホーチビサグラーといって素足で道をきれいに掃きそこでおはじき遊びをするのです。色ガラスでできた桜、桃、菊、バラの花の形をしたとてもきれいなおはじきでした。布の袋にガチャガチャいわせながら持ち歩き、勝負に勝ってどんどん増やし、負けた人に1銭、2銭で売って喜んでいました。儲けたお金を母に渡すと、「うちのお金はあるから、そんなことしないでいいよ」と言われました。



或る日とうとう父に見つけられ、「そんな悪い遊びはするな、お前は早起きだから、これからはすぐ飛び出さず、登校前に必ずヨハネ伝を1章ずつ読むように」と命令されました。

聖書の話は聞くのは好きでしたが、自分で読むのは嫌でした。明治文語体の聖書ですから小学生にはむずかしかったはずです。意味もよく分からないと言うと「分からんでも、読んでいたら後で分かるようになる」と強硬でした。時たま朝寝坊して、聖書通読の時間がないときには、ご飯を頂いてすぐ学校に

出かけるときもありました。

ところがある日、父に見つかって追いかけられ、その頃勉強道具は大きなフロシキに包んで背中に背負っていましたが、後ろからフロシキ包みを捕まえられてしまいました。家に連れ帰らされ、机の前に座らされてお説教です。

「今日は学校に行くな。いくら勉強ができて神様を敬わない人は動物と同じだ。学歴はなくても神様を敬い、神様に従う人は、真の偉人なのだ。お前は、体が弱い。おじいさんはお前を学校にやることに反対している。『ヌチドゥ タカラ（命が宝）』だと。しかし、お父さんはお前を神様に捧げたのだ。だから、今は弱くても、必ず丈夫な人になって神様のために働く時が来る。今のうちにできるだけの学問をさせておきたい。今ごろ女に勉強させると笑われる。学校にも行かずに、人の子守、女中奉公している人も多いだろう。しかし、お父さんはお前をどうしても婦人伝道師にしたいのだ。そのため女学校にも入れ、日本の神学校にも行かせる計画をしている。だから、お父さんの言うことを聞いてほしい。日曜学校で聖書をよく学び、家でも自分で聖書を読まないで神学校には行けないよ」と懇々と説き聞かされ、それからというもの、父がいよいよといまいと分からないままに聖書を読み続けるようになりました。

小学校5年生の時、クリスマス祝会で4、5名の女生徒が暗誦<sup>あんしゅう</sup>聖句をさせられたとき、私は詩篇23篇を暗誦しました。今でも文語体で覚えた聖句はスラスラと出てきます。



スパルタ式で行動派の父は、非常に厳格でしたが、私に対する愛情と期待は子供心にもひしひしと感じられました。生みの母と別れた償いとして他の兄弟たちよりも、特に目をかけてくれたのかもしれませんが。

私が7歳の時、弟、盛英が生まれ、鶴子、盛久、文子、光子と次々生まれるので、長女の私はいつも子守役。うるさくなって「アヤー、ナマカラ、ボウジャー、ナスナヨ（お母さんこれから、子ども生まないでよ）」と文句を言っても、母は、いやな顔もせず笑っていました。母は、気立てが優しく、ひたすら夫に仕え、子どもを育て、座敷にも上がらず、台所に控えているような、明治の女でした。新進気鋭の父とはしんみり話し合えるような間柄ではなかったようです。特に信仰の話などはできなかつたでしょう。今思えば夫婦とはいっても、2人ともかわいそうでした。

父は、郵便局の管理職を勤めながら、人の2倍、3倍働く人で単なるサラリーマンではおさまらなかつたのでしょう。電報配達、夜勤などは人の当番まで引き受けて夜遅くまで働いていました。

町の中にもかかわらず、広い屋敷だったので、牛小屋を作り、はやり始めの乳牛を3頭飼い、使用人を使って牛乳屋をしていたこともありました。これは人を使つての集金がうまくいかず失敗でした。

菓子作り専門の青年と共同経営で菓子店を開いたこともありましたが、長くは続きませんでした。また、事業を始めた友人の保証人になって失敗し、大きな借金を父が負うことになつ

たこともありました。その時は外地手当の出るヤップ島の郵便局に単身赴任し、完済することができました。

あずま屋洋服店も開きました。ハワイ帰りの伯母が当時余りはやっていたなかったミシンを踏んで労働服を作ったのです。賀川豊彦考案の賀川服という作業服でした。働く一般庶民のため安くて上質をモットーになかなかの好評でした。また職人も雇って紳士服も作るようになっていました。

東恩納家は当時にしてはめずらしい築山つきやまや池のある日本庭園つきの大邸宅でした。このように広い座敷と回り廊下つきの家を建て美しい庭を造ったのも、自分の家庭を解放して本土からの牧師先生やアメリカからの宣教師の方々を家に泊めたり、日曜学校や聖書研究会をしていただきたいためだったのです。

そのころ家の中にトイレを作るということは考えられない事でしたが、父は沖縄の古い習慣を破り、内便所に切り替えました。世話好きで気前がよく、人助けもよくやって、泊の町会長に何度も推薦されて務め尊敬されていました。泊一帯では、「ヤスー（耶蘇）東恩納」「ウェーキ（金持ち）東恩納」で通っていました。

しかし、子供の私には、耶蘇教は楽しい思い出とともにつらいこともありました。私が小さかった頃にはウランダヤー（オランダ館）といわれた宣教師館でクリスマス会が開かれ、寝かすと目をつぶり、起こすと目を開けて、「ママー」と声を出すママー人形を貰えるのが何よりの楽しみでした。プレゼント欲しさにたくさんの子供たちが集まりました。

伝道熱心な父は家に子供たちをたくさん集めて日曜学校を開きました。婦人伝道師の北島ツヤ子先生がきて指導して下さいました。ところが、わんぱく坊主たちが家の前のパパイヤを折ったり、中に石を投げ込んだり、庭を荒らしたり、悪さをしてくれました。学校の行き帰り、「ヤスー、ヤスー」と男の子たちからかわれましたが、いじめられる事はありませんでした。

小学校から一高女時代を通して、クリスチャンは私1人でしたが、みな親切でよく交わってくれました。楽しい学校生活ではありましたが、喘息の持病のために運動会、遠足などには1度も参加した事はありません。にぎやかに、楽しそうに出て行く友達を、校門の陰に隠れて泣きながら見えなくなるまで見送ったものです。家におればいいものを、わざわざ学校の門まで来て、元気な同級生の姿を見ては、泣くのですから、よっぽど我が身の弱さが無念だったのでしょう。



父が自分で作った日本庭園

## 女学校時代



このようにして、弱体ながらも泊小学校を無事終え、憧れの県立第一高等女学校へ進学する事になりました。入学試験の当日は、発作止めの注射を打ちながら、悲愴な気持ちで試験場へ向かいました。その頃の沖繩には、一高女、二高女、女子師範、工芸、技芸の5校があり、6年生の担任教師がどの学校に進学するか事情を考慮して大体決定してから本人と相談しました。経済的にゆとりがない学生でも成績が良ければ官費といって奨学金制度があり、女子師範に入って卒業後は小学校の教師に採用されました。琉球王朝時代の、女子学問禁止令の名残りは次第に薄れ、本土進学も盛んになりつつありました。

女学校の頃になるとキリスト教会も発展し、一中、二中の優秀な学生たちが盛んに出入りするようになり、活発な路傍伝道も行われていました。女学生はちょうちん持ち、男子学生はタンバリンを叩きながら、説教したり「ただ信ぜよ」と讃美歌を力強く歌いつつ伝道したものです。一中開校以来の特待生といわれた武元朝朗さんなどが盛んに証をしていました。私もちょうちん持ちをしながら路傍伝道のお手伝いをするのが楽しみでした。家庭集会や教会にもすすんで出席するようになりました。

ある風の強い日「今日は、教会休もう」と言うと、弟の盛久に「神様が守るから行こう」と励まされ出かけたこともあり

ました。盛久は私たち以上に信仰深い子でした。

父も家庭集会の指導者として熱心に働いていました。泊では正直者の床屋さん、知念のタラースー（太郎おじさん）が父の伝道の初穂として導かれました。この方は全くの文盲でしたが、聖書を読みたい一心で字を学びいつのまにか聖書が読めるようになりました。ところがお客のため店においてある新聞や雑誌などはちっとも読めず意味も分からない。ただ聖書だけが読めるという不思議なおじさんでした。

この方が病に倒れました。その頃は病人があると、雨戸を全部閉めて、風を入れなかったのです。臨終の床で急に起き上がり、家の戸を開けさせて「イエス様の姿が見える」と言いながら手を合わせた祈りの姿勢で安らかに死んでいきました。先祖崇拜の盛んな沖縄においてもステパノのように純粋なクリスチャンが育てられたのです。

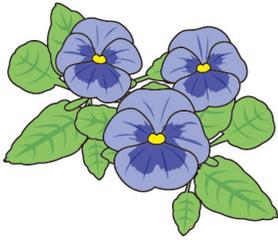
その他に、ガージャのタンメー（我謝のおじいさん）、メーガーのアヤー（前川のおばさん）など信者が少しずつ加えられて行きました。久米町の波の上通りにはバプテスト教会などもあり、愛隣幼稚園を併設してとても盛んでした。照屋寛範先生が牧師として活躍しておられました。帝大出のクリスチャン文学士、伊波普猷<sup>ふけん</sup>先生のもとには多くの優秀な学生たちが新しい生き方、思想を求めて集まっていました。

一高女の先生方は、ほとんど本土の方で占められていましたが、後に校長になられた川平先生や女子大卒で家政科担当の安元光子先生等が県出身の教師として教えておられました。下級生の頃は着物を着て、髪はヒラゲン（三つ編み）、上級生に

なると、渡辺式という袴を着て通学しました。病弱ながら、学校の成績も優等生に入っていました。いつも2、3番止まり。国語は好きで、特に読書が大好きでした。学芸会で「夕日の美」という文を朗読した事が懐かしく思い出されます。理数科は苦手、特に裁縫などの手仕事は不得手でした。私のクラスでは、岡野さんという方が級長で成績は抜群。東京女子医専を受験してパスしました。その年の卒業生の中で本土に進学できたのは、私を含めて3人でした。



私の育ての親（中央）と弟妹たち



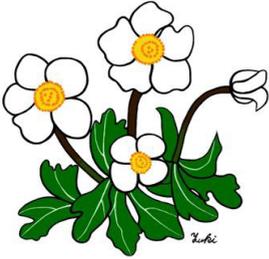
## 進学

.....

ちょうど卒業の頃、父が長崎の郵便局に転勤したので、私は同じ長崎の活水女学院神学部へ入学するよう勧められました。一高女を卒業した学生は代用教員の免許を30銭で買う事ができました。人間はいつどんな境遇に陥るか分からないから、万一の場合に備えてこの免許を持っておけば、一生涯心配がないと受け持ちの先生にも勧められました。しかし、私はこれを持つ事によって、かえって信仰から離れたり捨てたりする恐れがあると自分で考え、きっぱり断りました。自分で逃げ道を断ってしまったので、もう信仰一筋に進むよりしかたありません。おぼつかない信仰ではありましたが、此の世の安定よりは、一生涯神様にお仕えする生き方をしたいという気持ちだけは、ずっと持ち続けておりました。

でも神学部というのはどうも気がすすまず、英文科か保育科に行きたいとお願ひしましたが、父は許しません。神学部は未亡人とか年配の方が多く着物の肩揚げも少女らしい17才の私には場違いな感じがしました。同級生はみな立派な大人ばかり、おどおどしながらとにかく勉強を始めました。

# 活水女学院



休み時間に私と同年くらいの友人に「あなたはどうしてあんなおばさんたちと勉強するの？若いのにかわいそう」と言葉をかけられ、自分も神学部がいやになって英文科の教室に逃げて後ろの席に1時間座っていた事がありました。

しかし、その難しいこと、歯が立たない。一高女で4年間一応英語は学んだつもりでした。しかし、そもそも発音からまるで違う。私が教えてもらったのは、イギリス式の英語。ここは米国流。それに内容もとても難しくついていけないことがわかりました。

私の女学校時代は、英語廃止論の全盛時代で、特に女が英語など学ぶ必要はないと英語を教えている先生が言うのですから、話になりません。その先生の言われた言葉が面白い。「あなた方は英語の本を読める旦那さんに嫁ぐでしょうから、書棚に英語の本を逆さにして置かない程度の勉強でよい」と……。おかげでその程度の実力しか身につけませんでした。

仕方なく、神学部のお姉さんたちの仲間入りをさせてもらうことにしました。ところが神学部の教授、学生はみな親切で熱心な方々が揃っていました。大江邦治先生という神学教授との出会いによって生半可な私の信仰もようやく目覚めていきました。その他、笹森健一先生、女教授の中原先生、徳永良子

先生など、信仰深い先生方でした。授業の初めに祈り、また終わりに祈る。しかも涙ながらに祈りをささげるその真摯な姿に感銘を受けました。

私の部屋からは、長崎港が眺められ、3本マストの大きな外国船が出入りしていました。その船を見、汽笛を聞くと、那覇の港が思い出され、いつも泣いていたので、同室のお姉さんが「東恩納さんは船を見ると泣いてばかりいますから港の  
見えない部屋に変えて下さい」と頼んでくれて裏側の何にも見えない部屋に移されました。



活水女学院の校舎

校庭の港を見下ろす小高い丘には、真っ赤なつつじがいっぱい咲き乱れ、休み時間や、放課後はここでくつろぐのです。ところがつつじの甘い香りが鼻を突くと例の喘息の発作が始まります。せっかく美しい花園で友だちと楽しんでいるのに、また1人部屋に戻り、息も絶え絶え苦しまなければなりません。神学部の3年間の学びを終え、来春は卒業となりました。聖書の学びに対する興味が高まり、神様に献身したいと心は熱するのですが、悲しいかな相変わらずの半病人。

こんな弱体では婦人伝道師どころが、生きるのもやっとです。私はまるで、測候所の熟練した予報官のように正確に明日は天気が崩れるとか、秋風が立ち始めたと分かるのです。喉が

ヒーヒー鳴き始めるのですから・・・。

活水のつつじの丘に座って、真剣に祈りました。「神様、あなたのご用を果たしたいと思って、こんな遠方まで留学してきておりますのに、ここでもまた喘息に付きまといわれて苦しんでいます。発作が始まると食事が取れないし、勉強もできません。これは私の背負うべき十字架でしょうか。いつまでこの苦しみを背負って生きて行くのでしょうか。このままでは耐えられません。もしこの病を取り去って神様のご用のため用いて下さるのなら、一生涯、全身全霊をささげてあなたにお仕えします」と泣きながら真剣に神様に訴えました。これまでも熱心な祈りを幾度も捧げて、春秋を重ねておりました。

ところが、その年は冬を迎えてもあの苦しい発作が起こらない。私は癒されることを祈りつつも、信ずることができず「変だな、今年の冬はまだ暖かいのかな」と思っていたら、友人に「あなたの喘息治ったのね、どんな薬飲んだの」と不思議そうに聞かれ、初めて気づいたのです。「ああ、私の喘息は癒されている。神様、ありがとうございます。やっと、普通の体になりました」。18年間の苦闘から全く解放され、凱旋將軍のように手の舞い足の踏むところを知らず感謝と喜びに満ち溢れて、卒業の年を迎えました。

ある人は転地療法が効いたのだといいますが、長崎に来て、すぐ治ったわけでもなく、3年経った後に癒された私の場合は祈りの賜物だとはっきり分かっていました。生まれたその日から私を婦人伝道師にしたいと熱心に育て支えてくれた父も、ずっと真剣に祈りつづけてくれました。また、私自身も死ぬほ

どの思いで祈っていました。祈りはついに答えられたのです。生きて働き給う神のみ力をはっきり見させていただきました。喘息が治る薬を作ることができたら、ノーベル賞がもらえると聞かされていましたが、いまだに特効薬は見つかっていないはずです。この難病がノーベル賞以上の神のみ力によって取り去られたのです。

神様の治療は完璧です。94才になる今日まで、まったくの病知らず、お産の時以外は寝たこともありません。津嘉山家も短命の家系。東恩納家も90才以上生きた人の話しは聞いておりません。友人も大方亡くなりました。病弱だった私だけが1人生き残っています。ただぼんやりと生きていては申し訳ない。90余年の生涯を振り返るとき、私に注がれたこの神のご恩寵をどうやってお返ししたらよいのでしょうかと叫ばずにはおられません。



## 婦人伝道師

.....

さて、生まれて初めての健康と希望に満ち溢れて20才の春を迎え、活水女学院神学部を卒業です。最後の日、教室の床にひざまずいて、「いづくまでもゆかん、いづくまでもゆかん、いづくまでもゆかん、愛する主とともに」と涙ながらに歌い祈って下さった大江先生のお顔が今でもはっきり目に浮かんで心が燃えます。同級生の中

では私が一番年下で、すぐ教会の働きにつくには若すぎて不安でした。将来児童伝道に力を入れたいと考え大阪のランバス女学院特別保母科で、もう少し学びたいと計画し、父に相談したら、婦人伝道師以外に考えるなどとても怒って、学資を出してくれません。思案に暮れているところ、与那原の山宮醤油の奥さんになられた同級生の山城久子さんがハワイで医者をしている金持ちのおじさんに頼んでくれて、学資を出して下さいました。そのことを後で父が知り、学資を送ってくれるようになったので、1年の学びを無事終える事ができました。

いよいよ、憧れの婦人伝道師に任命され、初任地は佐世保。ここに父の妹、叔母が嫁いで下宿屋をしていたので私もそこに宿を借り、助かりました。

メソジストの教会で、牧師は井上先生。私を非常に可愛がって指導して下さいました。1年働いて次は福岡に転任。笹森先生が牧師で、独身の婦人宣教師、ワイズ先生、ビート先生のもとで楽しく過ごしました。女子大出身の谷口さん、静さん、みな同年輩のインテリでしたが親切でやさしい方たちでした。私が沖縄出身の田舎者であるにもかかわらず、馬鹿にする事もなく、



福岡で働いている頃の私（右端）

楽しい、楽しい博多、浜の町時代を過ごしました。ばら色の人生、花盛りといったところでしょうか。

そこへアメリカ帰りで、パリパリの伊東平治先生が訪ねてこられました。沖縄で伝道なさっておられたのですが、方言がわからず困っているとの事。「沖縄出身のあなたが、博多で働くなんて不合理だ。すぐ帰って来てほしい」と有無を言わず沖縄に引っ張っていかれました。

まだまだしっかりしていない若輩の私でしたのに、故郷沖縄では、那覇中央教会の婦人伝道師として歓迎してくださいました。伊東先生は英語が達者で美声の持ち主、奥さんはオルガニスト。華やかな雰囲気多くの女学生、中学生が集まっていました。讃美歌と英会話が盛んでした。

私はさっそく女学生のために「聖女会」を結成。伊東先生の指導を得て聖書研究、讃美歌の練習など、熱心に活動しました。川平朝令先生が女子師範、一高女の校長をなさっておられ、依頼を受けて1週に1度寄宿舎を訪問し、お話をしたり、讃美歌礼拝を指導しました。沖縄の将来の指導者となるべき若い女学生たちがキリスト教に触れて礼拝の荘厳さを味わっておく事はとても大切だよとよき理解を示して下さいました。一高女、二高女の優秀な学生がたくさん教会の門をくぐり、聖女会は盛んでした。

沖縄で3年、無我夢中で働いているうち、若い、若いと思っていた私も27才になっておりました。1929年(昭和4年)の12月、津嘉山朝弘ちようこうなる男性と結婚する事になるのですが、その風変わりな出会いの物語をちょっと書いておきましょう。



## 結婚



朝弘は首里メソジスト教会で、日曜学校を指導し、熱心に児童伝道に献身しているクリスチャン青年でした。女子大卒で比嘉先生というクリスチャンの国語の先生の家に文学青年たちがよく集まっていました。私の女学校の恩師でもあったので、夏休みに活水から帰った時、挨拶に行ったのです。

その青年たちの中に、朝弘もいて、私とは初対面でした。彼はこともあろうに私に一目ぼれ、時々活水に手紙をくれました。断りの手紙を出しても「1度見た太陽を忘れる事はできない。あなたは愛してくれなくても、僕があなたを愛する事だけは許してくれ」と美しい筆跡で熱烈な迫り方です。

まだ若かった私は結婚に興味がなく、激しく愛される事は重荷でしかありませんでした。親たちの結婚の<sup>もつ</sup>纏れ、またその後のあまり幸せともいえない再婚生活を見て、結婚に憧れなくなっていたのかも知れません。

いろいろな男性から何度もラブレターをもらって道に落としたりして友人に「こういうものは大切に扱わないと、相手の方に失礼よ」と注意されたりしたものです。



朝弘

私はどうして男性に好かれるのか、ふしだらな性質が自分にあるんだろうかと悩んで先輩の新川つるさんに尋ねました。彼女は「いや、あなたの明るさと無邪気さが男の人を引きつけるのよ」と言ってくれましたが、私は色気よりは食い気ととにかく何不自由ない娘時代を楽しんでいたかったです。

しかし、朝弘のひたむきな愛は5年経っても変わらず、自由奔放な私も、もうへびににら睨まれたカエルのように追いつめられて身動きが取れなくなってきました。

津嘉山の母は、美里御殿（ウドウン）の気位高い、アットーメー（姫）で、才色兼備のしっかり者でした。私との身分不釣り合いな結婚には大反対です。東恩納の父も、貧乏貴族でありながら格式だけは高く、しかも夫を早くなくして息子に頼り切っている母のいる津嘉山家に嫁いだら、その苦労は目に見えている。しかも、娘はぜひ牧師と結婚させたいとの夢があったので、これまた猛反対。これを押し切って結婚するなら、親子の縁を切るとまで言って、娘の幸せを願うあまり強硬に反対しました。

四面楚歌、結婚に賛成してくれる人はほとんどいませんでした。ただ、牧師の奥さんが「愛してくれる人と結ばれるのが女性にとって一番の幸せよ」と言ってくれました。

比嘉保時という若い牧師がおりました。私に結婚を申し込んできたのですが、朝弘から申し込まれている事を話すと「ああ、遅かった。しかし、朝弘君はいい人だ。先口せんくちに譲ろう」と去っていきました。朝弘はまじめで友人とは深い交わりをする人でした。

尊敬はしていましたが、愛するという感情とは程遠く、無感動のまま、引っ張られるように結婚に踏み切りました。

朝弘は東京の菊川小学校の教員をしていましたので、沖縄からは私1人で嫁ぐために旅立ちました。嫁入り道具も何も無い、柳ごうり1つのさびしい姿でした。独身時代は、お金の心配もなく、食べる事と旅行が好きでしたから、貯金もせず、しかも父の意志に背いて出て行くのですから、何一つ嫁入り仕度はしてくれません。12月の空と同じく、寒々とした心で、泣きながら上京しました。

東京での所属教会は駒込教会でしたので、せめて一生一度の結婚式は、洋風に華やかに挙げたいと思いました。しかし、朝弘は「我々は、見世物でもあるまいし、人前で、タンタタターンとマーチするなんて、滑稽こっけいだよ」と反対。思った通り変人だなと失望しましたが、夫に従うしかありません。自分の家に安谷屋あだにやのおじさんと呼んで、その前で2人で誓い合いました。友人代表に、大宜味つるさん一人。父も母もいない、祝福の言葉さえもない、夢敗れたさびしい結婚式でした。

明るく華やかな事が好きで、自由でのびのびと生きて



結婚

きた私にとって、礼儀作法の厳しい姑がいつもそばにいて、見張られる生活は息苦しく、憂鬱でした。主人も几帳面な人で、着物を着て座るときは膝の後ろにハンカチを入れて、汗で汚れないようにして座る。食事はまっすぐ正座。あまりおしゃべりもせず、音を立てずに静かにいただく。

マナーは行き届いているのですが、笑いのない家庭でした。それで「君の明るさが欲しかった。暖かい春風を我が家に吹き込んでくれ」と言ったのでしよう。



津嘉山の父と母

確かに賑やかな私がかきたために、家庭の雰囲気は明るくなりましたが、姑には、あまり気に入られませんでした。別居しようかと主人は言いましたが、息子を頼っている母親を見放すに忍びず、私が我慢すればすむ事だからと反対し、結局姑が亡くなるまで一緒に暮らしました。

今思えば、最高の教育者であられる神様の奇しい配剤であった事が分かります。小さいときに母に別れ、あまり躰られていなかった私の訓練のため、後から生まれ出る子供たちのため、なくてはならない姑でした。

朝弘は、またこんな事も言いました。「君は明るさはあるけど、日本のわび、さびを感じる心がない」と。そこで、女子大

の聴講生となって、清少納言や紫式部などの古典を学ぶように勧められました。あまり興味はありませんでしたが、一応やりました。夫に喜ばれる妻となるために。

朝弘は、封建時代名残の身分制度を非常に嫌い、神の前に平等であるべき人間を、身分、職業に関係なく愛し尊びました。勤務先でも、本音とたてまえを使い分ける校長とは馬が合わず、裸の付き合いのできる小使いさんたちに慕われていました。

厳正な判断力、個性的な深い思想、厳しさと優しさを兼ね備えた人物で、結婚して初めて彼の深さ、高さが理解でき、心から尊敬できるようになっていきました。強引な片思いではなく、やっと愛し愛される関係をお互いに体験し、幸せな日々でした。彼は確かに変人ではありましたが、凡人ではありませんでした。

東恩納の父が私を牧師と結婚させたいという願いを持っていた事を知ると、彼は以前に志した事のある牧師になるべく、結婚後すぐ神学の勉強を始めました。富永徳磨先生という組合教会から出た超教派の神学博士が駒込教会で神学塾を開いていました。先生と妹さんお2人とも独身で、伝道したり、若い人々を教育しておられる立派な先生でした。

私たちは、2人で農村伝道の夢を語り合い、ドイツ製のいいピアノを買って準備を整えていきました。私は近くの幼稚園で働いて資金稼ぎをしました。結婚の翌年に最初に妊娠した子は、幼稚園の滑り台から降りてきた子供にぶつかって流産しました。次に生まれたのが薫。長男の誕生で姑はとても喜んでく

れました。薫は小さいときから、「博士になりそうな顔しているね」とよく言われ、朝弘も親馬鹿ぶりを発揮しました。

3年経って、昭和9年に次男、繁誕生。やっと、賑やかな明るい家庭になっていきました。朝弘は菊川小学校で教鞭を執りながら、放課後は家で近所の子供たちにピアノを教え、そのアルバイト料で、夜は神学の勉強を続けました。4年間通い続け、卒業論文も書き終え、いよいよ念願の牧師免状を頂いたのは、31才の春です。晩学にもかかわらず、優秀でした。夢敗れたかに見えた私の人生にも再び光が射してきました。



## 闘病生活

.....

卒業祝いに、家族でキャンプをしようということになり、下田の海岸に出かけたのです。朝弘は、1人でキャンプ用具を自転車に積んで1日早く出かけ、私は幼い子供2人と母と一緒に、電車で行って海岸で合流する事になっていました。ところが、主人が出かけたその晩、嵐になったのです。ずぶ濡れになりながら、自転車を引っ張って箱根の山越えをしてやっと海岸についたころは、疲労困憊<sup>こんぱい</sup>。風邪を引いたのか、発熱し、楽しいはずのキャンプもそこそこに東京に引き上げました。帰宅しても、原因不明の高熱が続き、ついに結核の宣告を受けました。

結婚して5年目、希望に満ちた人生をスタートした途端、病に倒れたのです。あのころ、肺結核はハンセン病よりも怖がられていました。不治の病といわれ、ほとんど家族総倒れになる悲惨な例はいくらでもありましたから。

本郷町に住んでいましたが、この病気は東京のど真ん中で治せるものではありません。長引く病気だし、感染の恐れもあるので周囲の人々から嫌われます。思い切って沖縄の父に相談したら、早く帰ってくるように、適当な家もあるからと言ってくれました。繁がまだ2才で乳離れしていなかったので、主人と3人でまず沖縄に帰ってきました。

真和志村大道<sup>だいどう</sup>に、父が買ってある屋敷があり、13坪のかわら屋根の家もハワイ二世の友人が建てたまま引き揚げていたので、空き家になっていました。父のお蔭で、その人里離れた畑の中の一軒家にただで住まわせて頂く事になりました。わびしい生活ではありましたが、病人にとっては願ってもない最適の環境でした。後で薫と母を呼んで本格的な療養生活が始まりました。

一時病状は非常に悪化し、野辺送りのニンブチガニ（念仏鐘）がどこかで鳴ると、津嘉山のお父さんではないかと、大道の村の人たちは話していたとか。私は、ひたすら主人に付き添い、必死で看病しました。

幸い同じ教会員の家坂孝三郎先生が主治医として見て下さり、全くお金も取らず栄養剤や薬をくださり、また、悪いときには、悪天候の中でも夜中でも駆けつけて下さいました。

療養が長引くにつれて、主人が教員時代にためてあった貯金も底を突き、どこからの収入もありません。東京にいる、義理の妹の名護芳子に預けてきたドイツ製のピアノは、農村伝道の夢を捨て切れず、どんなに貧乏しても、手放したくないと思っていましたが、ついに売ってしまいました。夢は一つ一つ破れ、せっかくの牧師免状を役立てることもなく、いつ果てるともない闘病生活を送る朝弘の心境はいかばかりだったことでしょう。

朝毎に 学<sup>みふみ</sup>ぶ聖書を鏡とし  
櫛<sup>くし</sup>けずらばや 乱れ心を 朝弘

美しかった声も声量がなくなって出なくなり、あまり歌えなくなりました。私が1人で讚美歌を歌うと、「音程が狂っているから、聞き苦しい。お願いだから、歌詞だけ読んでくれないか」と言うほど、音感の鋭い人でした。

外に出ることもなく、聖書を愛読し、ますます沈思黙考の人になっていきました。私は生活苦にあえいで、あまり話相手にもなっておれません。「何もしないでいいから、ここに座ってくれ、語り合おう」と言うのですが、「座っていたら、子供たちは飢えてしまう」と、そそくさと立ち上がる私でした。

ああ、もう少し、しんみり語り合ってあげればよかった、可哀相な事をしたと今思い出すたびに後悔します。

当時は、米を買うお金がなくて、メリケン粉（小麦粉）を溶いて、のりを作って食べ、飢えをしのいだこともありました。「肺病は栄養をつけなさいよ」と見舞い客は言ってくれますが、栄養どころか、家族5人生きていくのがやっとの状態でした。

時々、東恩納のおじいさんが、泊から豆腐や魚を運んでくれるのが何よりのごちそうでした。家の周りの畑を耕して、芋や野菜を作り何とか生き延びていたのです。

その頃、賀川豊彦先生を招いて伝道講演会を開いたことがありました。私たちも個人的に会って、話す機会が与えられ、朝弘を紹介したら、すぐ「肺病だね」と言われました。「どうしてご存知ですか」と聞いたら、「声の出し方で分かる。牛乳を飲まずに、山羊乳を飲みなさい」と指導して下さいました。

さっそく乳山羊を飼い、ミルクを絞っておじやに入れ、味噌汁にも入れ、これが唯一の栄養となりました。山羊の草刈りは、私の責任。雨が降りそうな日はうんと刈りだめしておくのに、忙しい思いをしました。

貧しくて普通の薪は買えないので、やぶの竹や小枝を取って燃やしていました。長雨続きの後、ついに燃やすものが全く無くなりました。しかし、食べないわけにはいきません。どうしようかと思案しつつ、山の方に登っていきました。すると、大きな木の根元に洞穴があり、中に朽ち木の芯がごろごろ転がっているのです。アラバーキ(かご)に拾い集め、担いで来て、「こんなに薪が与えられたよ」と主人に喜んで報告しました。

朝弘は「神様は思いがけないところに薪を隠して下さいね。ありがたい。さあ、讃美歌を歌おう」と2人で感謝に満たされつつ、81番を歌いました。

恵みの光に誠は輝き 雲霧消え果て  
世は晴れわたれり

よろずのものみな み手よりいずれど  
こよなきみ恵み 聖徒に豊けし

くすしき恵みの み倉を開きて  
受くるがまにまに 賑わしたまえり

その貧乏のどん底で、こともあろうに妊娠してしまったのです。それに気がついた時、朝弘に「おろそうか、育てる事はできない」と言ったら、「神様がせっかく与えてくださった宝を墮胎する事はよくない。産めばなんとかなるよ」と励ましてくれました。

牧師の奥さんに相談したら、「あらまあ、困ったね。でも家に子供の古着やおむつもあるからそれを上げましょう。心配しないでいいよ」と言われました。赤貧洗うがごとき状態でさらに子供を産む事を恥ずかしいと思いました。

その頃、突然筋肉が硬直し、呼吸困難に陥り、倒れる事が2、3回起きました。カチューユー（鯉節を煎じたスープ）を飲むとケロリと元に戻って元気になるのです。今思えば栄養失調だったのでしょうか。

そんな中で赤ちゃん誕生。待望の女の子でした。朝弘はことのほか喜びました。しかし、髪の毛もまばらにしか生えておらず、痩せこけていました。「子供は親を選べないからこんな貧乏人の家に生まれ堕ちてしまって、あなたは本当にかわいそうな娘だね。ごめんね」と赤ちゃんを抱いて泣きました。

おばあさんは男の子に間違えられないように、はげ頭にリボンをくっ付けておきました。名前は「この子は神と人の恵みによって生まれたから、めぐみとつけよう」とお父さん。「めぐみは、あまり聞きなれないから、恵子にしよう」と私。しかし、「いや、神のめぐみ、そのものずばり、めぐみとつけよう」と言ってお父さんは譲りませんでした。

薫と繁は、津嘉山の山にちなんで山薫り、山繁るとつけたのです。東恩納のお祖父さんは、

津嘉山の 奥に育ちし若桜  
薫り繁りて めぐみたたえん

と3人の孫の名前を入れた和歌を作って祝福してくれました。女の子が加えられて、お金はなくてもなんとなく、家庭は華やかになりました。産婆さんが赤ちゃんに産湯を使わせるのを見ていた繁が、心配そうな顔をして「赤ちゃん、これがないね」と人差し指を出したので、産婆さんは「あら、お嬢ちゃんにおちんちんがあったら、大変ですよ」と大笑いしました。



長男薫7才と次男繁4才



## 県庁婦人指導員

.....

貧乏のどん底にあえいでいたとき、救いの手が差し伸べられました。帝大卒の吉田嗣延しえんさんが沖縄県庁の軍事援護課にいて、婦人生活指導員を探しておられました。嗣延さんの奥さんは、聖女会での教え子で、津嘉山澄が適任であると口添えして下さり、私は県庁職員として働く事になりました。

沖縄全島回って軍人遺族の激励、生活指導をする役目を仰せつかったのです。幼い子供と病人をおばあさんに預けて、私は地方に出張しなければなりません。

交通も不便な時代でやむを得ず、何日も家を空けて帰ってみると、主人は洗面器にいっぱい血を吐いて寝ており、幼い子供たちは、いっせいに親にすがりつく。私の帰りが遅いので、心配のあまり血を吐いたとか。外にでなければ収入はないし、悲しいつらい毎日でした。

しかし、県庁の仕事そのものは、私の性に合っており、人前で話す事はちっとも苦にならず、聴衆が多ければ多いほど元気が出ました。マイクもありませんでしたが、3教室ぶっ通して講演したり、野外でもよく声が通ると有名になりました。

その頃、女性の弁士は少なかったもので、珍しがられたのでしょう。県庁に津嘉山女史に講演をと依頼がくるので、同僚の男性職員が「講師まで指名してくるとは、けしからん。それは

こちらで決める事だ」と怒りましたが、結局は私がさせられる  
のでした。

講演の原稿作りは、朝弘の役目。豊かな知識、深い思想の持  
ち主で、書くのが好きでしたから、喜んで引き受けてくれました。  
「これだけの内容の話は、部長や知事さんの前で話しても  
恥ずかしくないよ。後の肉付けは君の腕次第だ。君も羽仁もと  
子と同じだね。偉い夫、後にあり」と苦笑いしていました。

禁酒運動や、廃娯運動にも、キリスト教婦人会の矯風会きょうふうを通  
して参加し、各市町村、離島までもくまなく飛び回った時期で  
す。主人の病も次第に回復に向かい、まもなく社会復帰も可能  
というところまでできていました。

自然に囲まれた大道の家は、3人の子供たちにとっても、飽  
きることのない遊び場でした。蝉、蛙、蝶々、トンボ、カタツ  
ムリ、ゆうなの木につくマーウーグワー（象虫）、乳山羊、卵  
を産むたびに大騒ぎをする鶏。みんな友達でした。この鶏は「マ  
カター、コッコ、マカター、コッコ」と鳴きました。肺結核を  
患って、行き場がなく、我が家の離れに住まわせてあげたおば  
さんの名前が、マカターでしたから、子供たちは、マカターお  
ばさんのために卵を産んでいると思ったものです。ウフドーモ  
ウ（大道の丘）の松林の間から朝日が昇り月が顔を覗かせ、星  
が降るように見える静かな1軒家でした。

グモの巣 輝かせつつ初日さす  
ここ狭庭サニワベに 幸かがの赫よふ 朝弘

昭和16年の元旦に、しみじみと小さな幸せをかみしめつ  
つ、詠んでいます。

女子師範付属国民小学校に通学していた薫、繁は、病弱の父親にも似ず、元気いっぱい2人揃って優等生に選ばれたときには、喜びに満たされました。担当教師がどんな家庭の子か両親にお会いしたいと言われたそうです。朝弘は「先生が家に来て、痩せこけた不精ヒゲの僕の姿を見たら、腰抜かすだろうな」と寂しそうに笑っていました。

療養しながらも、よく読書し、子供の躰、教育に非常に厳しく気を配ってくれました。学校から帰ってくる子供たちを、墨を磨<sup>す</sup>って待ち構え、机の前に正座させて、まず毛筆の練習をさせます。

入り口の方では、村の子供たちが、「カオルー、カオルー」と呼びかけ、出てくるのを待っている。薫、繁が遊びたくて、落ち着きをなくすと、ポカンとげんこつが飛びました。

その頃、腹違いの弟、朝松<sup>ちょうしょう</sup>に出した手紙を少し長いですが、書いておきましょう。朝弘の残した直筆はこの1通の手紙だけです。すが子がまだ見た事もないお父さんはどんな人だったか知る手がかりになると思いますので・・・。

「おめでたう。

今朝5時過ぎ うす暗く 星またたき 樹静もる

時起き出で 裸になり タワシマサツをし

讚美歌を歌い 祈りつつ過ごす

また起きて出てきた薫を裸にし同様にす

めぐみも 澄子が同様にす

繁 寝坊して まだしてやらず

それから 聖書を読み

今第1の手紙を君に書く

第2の手紙を芳子にやらうと思ふ

朝日は<sup>うふどうもう</sup>大道丘から まだのぞかない

草の穂末<sup>ほすえ</sup>が光ってゐる



朝弘の手紙

今年もまた壮健で過ごしてくれ  
雄々しく送ってくれ生活の<sup>けいかく</sup>計劃を立てて  
靈と体を大事に使って  
神と国家のお役に 立ってくれ  
神と国家と言ったが 別々ではない  
国家のお役に立つ事  
此 並に神のお役に立ったのだ  
神の御旨にかない  
国家のお役に立ってくれさえすれば 此 又 親や  
兄弟の願ひにも浴ふたのだ  
今年は祈りつつ 思ひ切って  
自分の前途を開拓すべし

金がなければ補助もしてやろうと思う程だが  
此は当分君の補助になるまいと  
決心してゐると言う程度  
(つまり 君に金をつかわせなければ  
それだけ君を助けた事になる)

人助けにもいろいろある  
ちょびり ちょびり 小助けもあり  
計劃的に大きく事業を起こして  
人を働かせる助け方や  
金や物をめぐまぬ助け方もある  
祈りによる聖浄な家庭をきづき  
有用な子供を育て上げ

「社会の一有能団体」家庭を築く人助けもある  
こうなるとどこまでが人助けか  
自分助けか分からなくなる  
即ち 自分の生活そのものが 一家をあげて  
全体が 人助けとなる  
僕はこの方の生き方を行くものだ  
大まかに見て これ迄が さうだった  
2601年以後 又 この道を行く

では さやうなら

1月1日 朝弘

朝松 弘

経済的にも少しゆとりが出て、ほっと一息ついたところで、昭和19年9月11日、すが子誕生です。めぐみと違い、丸々と生まれました。

朝弘は写真を撮る代わりに、赤ちゃんの泣き顔、寝顔、あくびを細かく写生しておりました。絵が上手で、母の肖像画や、自画像など、見事なものでした。残念ながら、それらの絵も、克明に記されていた闘病日誌もすべてなくなってしまいました。

女学校の同級生に顔も心も美しい、松山すが子という人がおりました。自分の子供につけたいと思う名前でお父さんも賛成してくれたので、すが子と名づけました。

## 疎開

.....



もう、敗戦の色も濃くなりつつある中で、10月10日の空襲を迎え、1ヶ月目のハチアッチー（産婦の初歩き）は防空壕でした。那覇市は火の海、大道の家は負傷兵で満杯。童顔の抜けきれない、若い兵隊さんたちが「お母さん、お母さん」とうめき苦しんでいました。

4年生の繁は、前もって宮崎に学童疎開させておりました。戦況は、日に日に厳しくなり、学童疎開船津島丸が撃沈されましたが、一般には報道されませんでした。

我が家に間借りしていた通信隊の隊長は、「海は陸よりも危険だし、我々と行動をともにすれば、安全です。日本軍は負けたふりをしているだけで、これは戦略。敵をおびき寄せておいて、後で打ち破るのです」と疎開反対。

しかし、真和志村の村長さんは断言しました。「日本に絶対勝ちめなし。ここで死ぬのは犬死に同然。あなたたちは、小さい子供たちを抱えているから、疎開して、将来沖縄復興のために尽力してもらいたい。自分は責任上、疎開することはできない」

東京の妹芳子の家族を頼りに、8年間の闘病生活を終え、やっと治ったばかりの主人、母、子供3人を引き連れて最後の疎開船に乗り込みました。長男薫は、中学1年生。末の子、

すが子は生後2ヶ月。

船底と船室は超満員。甲板にも天幕を張って、いわしの缶詰の

ようにぎゅうぎゅう詰め。足を伸ばして寝ることすらできないほどの混みようでした。乗船すると1人1個、救命具が渡され、死を覚悟しての旅であることが感じられました。

見送る人もなく、夜陰に紛れて静かに船は那覇を出港しました。昼は島陰に隠れ、夜は燈火管制のもと、鹿児島に向かって航海しておりました。しかし、まもなく敵の潜水艦に追跡され、魚雷攻撃を避けつつ、ジグザグ航海を続けておりました。

3日目の夜中3時ごろ真っ暗闇の中で、大きな爆発音がしました。敵艦からの魚雷攻撃を受けたのでした。船長が大声で「敵に襲われたが、無事魚雷を避けることができた。しかし、2度目の襲来を予想せねばならぬ。全員救命具を着用し、号令が出たら、海へ飛び込むように」との指令が出されました。

船中の人々は、もう恐怖におののき、泣き叫ぶ者、わめく者、地獄絵のようです。



後列—私たち夫婦、名護芳子、母、  
前列—薫、めぐみ、朝重、繁

私はすが子を背負って救命具を着用し、子供たちにも着せました。ところが母の救命具がなくなっているのです。70才以上の年寄りには、割り当てがありませんでした。母の隣にいたおばあさんは、高齢で救命具をもらえなかったのですが、母のものを取ってしまい、孫が持ってきたと言い張って返してくれません。母は争わずに、「私は死んでも天国に救っていただけるから、大丈夫」と落ち着いていました。

主人は家族を誰もいない上甲板に連れて行きました。夫婦、母と3人の子供は、抱き合うようにひざまずいて祈ったのです。「神様、今私たちは海の藻くずになるかもしれません。魂をみ手にお委ねいたします。み国に救って下さい。ただ一人残される繁のことが気にかかります。孤児になっても、どうぞ彼を守って下さい」。死に対する恐れはなくなり、平安な心境でしたが、繁のことを思うと涙が出ました。

どのぐらい時間が経ったのでしょうか。ものすごい大音響が響き渡ると同時に、水面高く、水しぶきと火柱が立ちのぼりました。疎開船を執拗しつように追いかけてきた敵の潜水艦に、こちらから発射した爆雷ばくらいが命中したのです。何がどうなったのか分からず、人々はまた、泣き叫び、大混乱に陥りましたが、無事助かったことが分かり、互いに喜び合いました。

九死に一生を得る思いでやっと鹿児島港に着きました。地元の婦人会の方々が、旅館で歓迎会を開いて命懸けの船旅の労をねぎらって下さいました。

後で聞いたことによりますと、港に着いた船の船腹には魚雷のかすめた傷跡が何本か付いていたそうです。神様の特別の守

りがあったことをはっきり知ることができました。

ああ、これで繁にも会える。うれしくて鹿児島に着くと、すが子をおんぶして、薫を連れ、すぐ宮崎に向かいました。

暗い中、宿舎を訪ね、引率の先生方に挨拶して、彼に会ったのは、夜の10時頃でした。寝ていたところを起こされて、きょとんとしている繁。久しぶりに会う繁。懐かしかった。「生きて会える日があったのね」。うれし泣きしながら、抱きしめました。他の子供たちも起き出してきて、私たちをうらやましそうにみえています。「まもなく、お父さん、お母さんが迎えにくるから、心配しないでね」と慰めましたが、実際はすでに親がなくなっている子もいたのです。

繁を連れて帰ろうとすると、近所の友達だった、津嘉山潔君が、「おばさん、僕も繁と一緒に連れて行って」と言い出し、ついて来ようとするのです。「あなたのお母さんが迎えにくるから、それまで待っていなさいね」となだめすかして別れましたが、ほんとにつらい思いでした。

見送ってくれた、小さな子供たちの寂しそうな顔、顔、顔……。泣きながら別れました。多くの子供たちは、そのまま迎えにくる人もなく、孤児となって残されたことでしょう。潔君もその1人になってしまったのです。

戦争ほどいやなものはない。こんなつらい、悲しい思いをするのかと思うと、ほんとに戦争の恐ろしさを身にしみて感じるのです。

次は、超満員列車に乗って東京に向かいました。持ってきた弁当は腐って食べられず、駅弁を買うために、主人が駆けつけるとすでに売り切れ。駅で停車するたびに、主人は走り回りましたが、弁当売りのところに人々が殺到して、食べ物は何も手に入りません。

おなかを空かせた子供たちは、しょんぼり座っていました。ふと見ると、めぐみが隣の人のおにぎりにそっと手を置いて触っているのです。

「人のものを触っちゃ、だめよ」と注意すると、

「ワーッ」と泣き出しました。おにぎりを食べていたおばさんは、びっくりして

「どうしたんですか」

「触っていたので、注意したら泣き出したのです。沖縄から来たのですが、弁当が買えなくて・・・すみません。」と言うと、

「まあ、沖縄からいらしたんですか、大変でしたね。お腹すいたでしょう。お嬢ちゃん、このおにぎり食べてちょうだい。」と分けて下さったのです。

夢中でおにぎりをほおぼる子供、辛い中にも人の親切が身にしみる尊い経験でした。

すが子が汚したオムツは、汽車の窓から突き出して乾燥させ、再利用しながら、いよいよ東京到着。冷たい雨の降る中、芳子の家を尋ね歩き、やっと見つけました。

日本橋の芳子の家に暖かく迎えられたときのありがたさは忘れることができません。暖かいお風呂に入れてもらい、お祝の小豆おこわをごちそうしてくれました。目の色を変えて、ガツガツ食べる子供たちの姿に涙し、命ながらえて再び家族揃って食卓を囲む幸せに浸ったのでした。

名護朝徳<sup>ちようとく</sup>、芳子はほんとに親切でした。11月に入ってもう寒かったのがっちりした体格の朝徳は、自分の上着を脱いで朝弘に着せてくれました。

彼は三越専属の洋服店を経営していたので、反物<sup>たんもの</sup>を入れたリュックを担いで、農家に行き、食べ物と交換して、急に増えたこの大家族を養ってくれたのです。名護家6名、津嘉山家7名、合計13名。しかも、各々赤ちゃんを抱えながらの共同生活でした。

朝徳は家族を疎開させるために、埼玉県大宮市に家を買って用意してありました。東京の空襲がひどくなり始めたので、我々も一緒に大宮に移りました。

家の横には、ぶどう畑、裏には田んぼが広がり、戦争を忘れさせるような、のどかな田舎の風景が心をなごませてくれました。

しかし、度重なる引っ越し、空襲からの避難で、過労になった朝弘は、結核を再発し寝込んでしまいました。

ある日、咯血し、私と薫は医者を探して家を飛び出しましたが、見知らぬ土地で手間取り、やっと医者を見つけて家に帰っ

てみると、すでに事切れておりました。

別れに一言も交わさず手を取って最期を看取ってあげることができず、亡くしてしまったのは残念でたまりません。「赦してね」と頭を下げ、ただ涙。ああ、夢多く、豊かな才能に恵まれた彼の生涯は、1度も説教壇に立つこともなく、はかなく終わってしまいました。

享年42才でした。

疎開先で主人を失い、敗戦を迎え、姑と中学生を頭に、末は乳飲み子の子供4人を抱えて、私はまったく、茫然自失の状態でした。

朝徳は「これから僕が一生懸命働いて薫と繁を大学まで入れてあげるから、姉さん心配しないでね」と心から慰め力づけてくれました。彼は実に生活力のある、誠実勤勉な、私たちの大黒柱。朝徳の側にいれば、何の不安も、不満もなく生きることができました。うちの子供も、自分の子と同じようにかわいがり、ほんとに寛大な私欲のない夫婦でした。

しかし、試練は更に続きます。頼りにしていた朝徳がまもなく、戦後大流行した発疹チフスに罹り、これまたあっけなく亡くなってしまいました。

日本中が戦渦に巻き込まれ、どこの家庭も筆舌に尽くし難い苦しみにあえいでいる時でしたから、芳子も私ももう泣き悲しんでいる暇ありません。子供たちのために奮い立ちました。いつまでも居候になっているわけにはいかないので、私た

ちは、大宮を出て、再び東京に戻りました。

まず、芳子の店からたくさんの生地をもらい、それを売って生計を立てることにしました。江古田<sup>えこだ</sup>駅前の繁華街に出て行き、道の側にゴザを敷いて商売を始めました。恥も外聞もおかまいなしで人々に呼びかけながら、必死で1日中売りました。おっちょこちょいの私は、布を測り違えて丸損をしたことも、1度や2度ではありません。

八百屋の手伝いもしました。大声を張り上げて「さあ、寄ってらっしゃい、安いですよー」と道行く人々に呼びかける。県庁の婦人指導員として講演をして回ったときに鍛えた声が、こんなことに役立つとは夢想だにしませんでした。

薫にポスターを書かせ、屋台を引いてところてん売りをしたり、さらし飴を売ったり、みかんを売ったり、洗濯石鹼、日用雑貨、手当たり次第なんでも売り、わずかな収入を得て、家族6人生き延びていました。食糧難の中で、子供たちに何を食べさせていたのか覚えていませんが、よちよち歩き始めたすが子が丸々肥っていたのを思うと飢えることもなく、日ごとの糧が与えられていたことが分かります。

ある日、いつものように駅前広場で、あまり人に顔を見られないように、風呂敷を深くかぶって物売りをしていました。すると、

「おい、澄ちゃんじゃないか」

びっくりして見上げると、朝弘の旧友、武元朝郎さんが、こ

れまた驚いた顔で覗き込んでいます。

「何だ、そんな姿になって。沖縄に帰れ。もう戦争も終わって復興事業が始まった。君の仕事はいくらでもある。早く帰れ」

「主人は死に、帰るお金もありません。」

「旅費は僕が工面しよう。」

「ありがとうございます。」

涙が出るほど嬉しかった。友情のありがたさを、しみじみ感謝し、早速切符を買い、沖縄に帰る準備を始めました。父も生きていることが分かり、勇気づけられました。

昭和21年（1946年）の秋、沖縄に引き上げるグループに加わって、名古屋の収容所までやってきました。

そこには、飛行機の格納庫だった大きな建物がいくつもあり、海外からの引揚者、疎開先から沖縄に帰る人、復員軍人が何万人も収容されていました。帰る目的地に応じて分けられ、食料寝具が配給されました。軍隊式に、「メシアゲー」の号令で各班ごと、バケツのような器を持って並ぶ。今ニュースで見る世界各地の避難民の姿とまったく同じです。

その収容所に入るとき、私の友人にばったり出会いました。その頃はお医者さんの奥さんになってさっぱりとした身なりをしています。私は、主人の遺骨の入った白木の箱を胸に抱え、年寄り子供を引き連れ、やつれてみすばらしいモンペ姿でした。

彼女は、私の変わり果てた姿を見て、「澄子さん、あなたは若い時から神様に仕えて正しく生きてきた。私はあなたをかわいそうだと思うよりは、あなたが仕えている神様を恨むよ。誠実な人をどうしてこんなに苦しめるの？何のために信心しているの？」と泣き出してしまいました。

私は返す言葉もありません。しかし、「神様の深いみ旨は、今は分からないけど、私に必要な試練なのよ。神様を恨むなどとは言わないでちょうだい。神様の愛に変わりはないのよ」と涙ながらに答えました。

小さい時からクリスチャンとして神様の証しをするために生きてきたけれど、結局は、神様の御名を辱めることになったのかと苦しみました。



## はいえつ 天皇拝謁



そんなある日、この収容所に、天皇陛下が行幸されることになりました。名古屋地方を視察なさる途中、沖縄へ帰る人たちにも会ってお詫びをしたいと仰せられ、収容所にも行幸されるというのです。収容所で、北部地区、南部地区、海外引揚者、復員兵、婦人と5人の代表が選ばれ、拝謁することになったのです。

その中の婦人代表として私が選ばれました。ありがたいこ

とではありますが、私は人前に出られるような着物さえ持っていません。他に適当な方がいるでしょうと固辞したものの、「君が指名されたのだよ。これは千載一隅のチャンス。こういう機会は人生に2度とないから、ぜひ行きなさい」と私を推薦してくださった知り合いの校長先生に言われ、ついに陛下の前に出る決心をしたのでした。

その日は、風呂に入れられ、洗髪して身を清め、爪を切り、姑の着物から仕立て直した新しいモンペを借りて、行くことになりました。

その時の光景は決して忘れることができません。敗戦国の天皇とはいえ愛国心に燃えていた私ですから、恐れ多くて顔を上げることもできず、感激で胸がいっぱいでした。

一人一人に握手をして下さり、「沖縄へ帰れるようになってよかったね。またしっかり頼みます。」と励ましのお言葉を頂いた時には、興奮のあまりガタガタ震えていました。

控え室に戻ると、たくさんの報道陣が押しかけてきて「陛下は何とおっしゃいましたか。」と尋ねるのですが、震えが止まらず、頭は空っぽ。「分かりません、忘れました。」「陛下のお言葉を忘れるなんて、とんでもない。落ち着いて、落ち着いて。さあ、しっかり思い出して下さい。」やっと人心地がついて報告することができました。

すっかり落ちぶれて、惨めな姿になっている私。クリスチャンといいながら、神様の御名さえも辱めているような私なのに、天皇にお言葉をかけていただくという破格の恩典に預か

り、どんなに励まされたか分かりません。生活の重荷に打ちひしがれ、壊滅状態になっている沖縄に帰ることを思うと絶望的になることもありましたが、陛下のお声は暖かい思い出となって、頑張る力を与えてくれました。

サムエルの母、ハンナの感謝の祈りが、そのまま私の心境でした。

「貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、王侯と共にすわらせ、栄誉の位を継がせられる。」 サムエル記上2：8

小さな島国日本の、しかも敗戦国となって憔悴しておられた陛下にお会いしてさえも、震えが止まらないほど、感激したのです。まして、諸王の王として、千々万々のみ使いを従えて、再び私たちを迎えにこられるイエス様にお目にかかる喜びはいかばかりでしょう。



## 帰郷

.....

2年間、故郷を離れていただけなのに、島の様子は全く変わり果てていました。かつての緑の島は、廃墟と化し、どこを見ても昔の面影はありません。落ち着く家もなく、食料、衣類も乏しく、人心はすさんでいました。

私たちは、父を頼って佐敷村に行き、一緒に住ませてもら

うことになりました。真ん中につっかえ棒の柱が1本立っているテントなのです。床は竹を編んで作ってありました。ほんとに雨露をしのぐだけの仮住まいなのです。

2才のすが子が、薄暗いテントの中に入りたがらず、家もないのに「オウチニ カエルー」と泣きました。

10畳ぐらいのテントに弟家族も一緒に、15,6名は住んでいたと思います。狭いうえに床もガタガタなので、すが子は真ん中の柱にいつも頭をぶっつけていたらしい。盛英おじさんが、すが子に、柱を指差して「これは何」と聞いたら、ちょっと考えてから、「アタマコツン」と答えたと懐かしく語りつがれています。

当時は食料事情も深刻で、食料品の配給もほとんどなかったもので、食べられる物を探して山に登り、「ソテツ」の根を掘り出したものでした。その根をすりおろして、数日間水にさらすと、バケツの底に白く沈殿するので、これを乾燥させて粉にし、小麦粉のように使っていました。

ところが「ソテツ」の根は、水にさらすのが不十分だと中毒を起こすこともある危険なシロモノでした。



ある日のこと、たまには天ぷらのご馳走でも食べようかなけなしのお金をはたいてアメリカ製の油を買ってきました。油を鍋に注ぎ、薪をくべて熱し始めました。温度が高くなるにつれて少し緑がかってドロツとした油が急にムクムクと激しく泡立ち始め、妙な臭いがしてきました。

アメリカ人は変な油を使うものだと思いますながら、何とか天ぷらが揚がりました。ところが最初の一枚目はやっとなめて食べたのですが、それ以上はどうしても臭いが鼻について喉を通りませんでした。

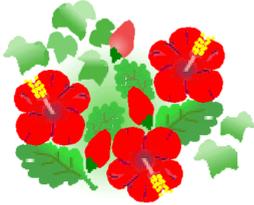


終戦後のオンボロ家  
すが子はカメラを恐れて泣いていた

ずっと後になって分かったことですが、実はこの油は自動車のエンジンオイルだったのです。この油がだいぶ出回っていたようで、近所の人たちの中にもこの油を食用にて下痢をし、具合が悪くなったという人がいました。

またある時、お友達にアメリカ製のきれいなビンに入ったクリームを頂きました。化粧水もない頃ですから大喜び。外出前にたまにはお化粧でもと思って、そのクリームを顔に塗りました。ところがどうもおかしいのです。私を見た子供たちが笑い出しました。急いで鏡を覗くと、何とドーランを塗った舞子さんみたいに、手も顔も真っ白で突っ張っているのです。薫に英文で書かれたビンのラベルを読んでもらったら、クリームは

クリームでも白革用の靴クリームだったので。



## 民政府時代、婦人会活動

.....

その頃、沖縄民政府文化部長、当山<sup>せいけん</sup>正堅先生は、クリスチャンの立場から、物資の援助と共に精神復興にもっと力を入れるべきだと感じておりました。そこで各市町村を巡回して、信者、牧師を招集し疎開先からも牧師を迎えて、簡単な教会堂を建て、各教派を合同させて、沖縄キリスト教団を組織しました。

また、米国留学制度も設けられましたが、申し込み用紙の宗教欄にキリスト教と書けば有利だとのことで、教会を訪れる優秀な青年男女も多く、世は正にキリスト教全盛時代の感がありました。

私も、当山正堅先生のもとで民政府文化部職員として採用されることになり、クリスチャン指導員として喜んで迎えて下さいました。

沖縄じゅうが、戦争の後始末でごった返してしまいましたので、私は、各市町村を回って、婦人たちを集め「恐ろしい戦争も終わった。これからは、各家庭をよく守って、平和な時代にふさわしい立派な家庭を作らねばならぬ。家庭の中心は主人であるが、運営は主婦の手にかかっている。良い家庭は、良い社会を作り、良い社会は、良い国家を作る。これからの平和な世界は、

結局私たち婦人の手に委ねられている」と女性の任務の重大さを説きました。

本土より一足早く、1945年には婦人参政権も認められ、史上初めて女性に選挙権が与えられたのです。しかし、実際には、妻に相続権はなく、法的には無能力な旧民法下で女性はまだ苦しんでいました。

また沖縄の古い習慣が、主婦たちの手かせ、足かせとなって、身動きの取れない状態に追い込んでいたのです。祖先崇拜を中心とした行事や、ナンカスコー（死者のための7日毎の焼香）に時間や金をかけすぎないように、冠婚葬祭の簡素化を訴えて、沖縄の隅々、各離島まで飛び回りました。

1949年、ようやく沖縄婦人連合会が組織され、初代会長は、武富セツ先生、副会長仲村信さん。そして松岡ヨシさんや、吉田ツルさん、私は事務局の一員として活躍しました。沖縄の婦人たちは、戦後の極度の貧しさ、困難にもめげず、未亡人となった方も多くありましたが、雄々しく立ち上がりました。

新しい時代にふさわしい生活の合理化や、生まれて初めて我々女性が政治に参加できた意義に関して、熱意を込めて講演する私たちに、各地方の婦人たちも積極的に答えてくれ、会場はいつも満員でした。

また、選挙の応援演説に駆り出されることもありました。私は、党派にこだわらず、社会をよくするために力を尽くして下さる方を応援し、また、私の信念を聞いて下さる聴衆が集まる場所なら、招かれればどこへでも出かけて話させていただき

ました。女性弁士は物珍しさもあって、野次も飛ばさず、熱心に聞いて下さったものです。

世を挙げて、生活改善、新生活運動を唱えているのに、男性、特に指導者の中には相変わらず「ユーベー、ハタベー（妾の2号、3号）」を囲っている人がいました。宴会の二次会は、妾の家に行って、飲んだり、食ったりが当たり前。県民の代表ともいうべき役人、政治家のこの現実の姿を見て、私は義憤を感じました。

琉球王朝時代からの名残で、地位、権力、財力のある男性は、男の甲斐性として妾を持つのは誇りでさえありました。妻たちも昔からの習慣だからと、あきらめにも似た常識として受け入れていたのです。そのために正妻と妾、その子供たちの間の感情のもつれ、財産相続の問題など、いざこざが絶えません。

それで私は、戦前は廃娼運動、戦後は新生活運動に参加して、聖書に示されている正しい夫婦関係、清純な家庭のあり方を沖縄県民に訴えたかったのです。

ある時、糸満町長選挙の応援弁士の依頼がきました。喜んで引き受け、ここぞとばかり熱弁を振るいました。

「有権者の皆さん、明るい幸福な家庭こそ私たちの理想。指導者を選ぶときには、その家庭を見よ。ユーベー、ハタベーのいる候補者には絶対投票するな」と・・・。

この演説が功を奏してか、この方、見事落選。後で聞いたら、複数のユーベーをお持ちだったとか。

しかし、この男性よくできた方で、わざわざ私の家まで、お魚を持ってこられ、「私の不徳のいたすところ、ご迷惑おかけしました」と詫びておられました。しかも次の選挙の時にも、凝りもせず、再度私に応援を頼み、「今度は反省し、出直しましたから、よろしく」と言われました。

男性の無節操を徹底的に非難はしましたが、こういう悪習慣が作られた裏には、女性の非もあることを認めないわけにはいきません。沖縄の女性は勤勉ですが、結婚して子供が増えるにつれ、なりふりかまわず働き、家も汚れっ放しにして子供にだけ注意を向け、夫を邪険に扱う傾向がありました。

一方、チージ（遊郭）の女性たちは、いつも若々しく、美しく身づくろいをし、おいしい料理とやさしい笑顔で男性を迎えてくれる。これでは男たちが家を抜け出して、遊郭街に走ったり、妾を囲うのも当たり前。

それで、婦人の集いでざっくばらんに話しました。「主婦は、もっときれいに、清潔にしましょう。昼間は労働で汚れているかもしれないが、夜は子供たちを早く寝かせて、ユーフルグワー（お風呂）にも入って、カバカバーと（いい香りを）させて、夫が楽しい気持ちになるように努力しなければいけない。2人の語らいの時間はぜひ必要。子供に尽くすことも大事だが、肝心の夫にもっと気配りしてあげて寂しい思いをさせないようにしましょう。」

あの頃に比べたら、沖縄もずいぶん改善されたと思います。ユーバーハタバーなる語も死後になってきましたから。



## セブンスデー・アドベンチスト 教会との出会い

.....

その後、沖縄キリスト教団の婦人伝道師として召され、本職に戻って伝道活動に専念するようになりました。その頃、沖縄復興の一助として、アメリカのS D A（セブンスデー・アドベンチスト教会）を中心としたクリスチャングループから、乳山羊660頭が送られてきました。その山羊の世話人の1人に、私の生みの親の弟、屋比久孟吉がおりました。

叔父は、春光を浴びつつある沖縄キリスト教会に、S D A 教会が1つもないことを憂い、何とか伝道の足がかりを得たいと考えていたとき、姪がクリスチャンであることを知りました。姪とはいっても親戚づきあいは全くなく、会ったことさえありませんでした。叔父はまず私を探し出し、親戚の名乗りをあげました。

終戦後間もない頃、ハワイといえば、私たちにとって憧れの島でした。そのハワイに叔父がいたこと、しかも同じクリスチャンであることを確認しあって喜びました。

彼は、任務を終えて、ハワイに帰るやいなや、教会に沖縄の状況を報告し、今が伝道のチャンスであることを訴えました。ちょうど、世界総会総理、マックエルハニー長老がハワイに立ち寄られたのを幸い、彼らは沖縄伝道要請の陳情書を総理に手

渡しました。

直ちに伝道開始の決議がなされ、早速、E. E. ゼンセン牧師が宣教師として任命され、また、その働きを助けるために、信徒でありながら、全的献身をしている屋比久孟吉が、単身来沖することになりました。



ハワイから最初に SDA 信徒伝道者として来た  
叔父、屋比久の家族

しかし、当時は軍政府の許可がないと、勝手に伝道を開始できなかったのので、許可を求めたのですが、なかなか下りません。

その理由は、沖縄キリスト教団が結束して、セブンスデー・アドベンチスト教会は、人心を惑わす異端だから沖縄に入れないように、と軍政府に嘆願書を出してあったためと後で分かりました。

ところが、チャプレンの1人がアメリカにおける SDA 教会の働きを紹介し、決して異端ではないことを証明したので、ついに許可されました。

叔父は、ハワイで発行されている日本語の「預言の声」という聖書通信講座を携えてきました。聖書教師である私に、牧師でもなく、一信徒にすぎない叔父が聖書を教えるというので

す。

まず「あなたは聖書を、神の言葉として信じますか」と聞かれました。「もちろん信じていますよ」「私の言葉なら、信じないだろうから、聖書から引用しましょう」と言って教理の研究が始まりました。

それは、今まで自分が学んできたこと、また教えてきたものとは、だいぶ違ったとらえかたでした。特に人間の死後の状態、キリストの再臨、安息日問題などは、生まれて初めて耳にした教えでした。

屋比久は使い古した分厚い聖書をポンポン開いて、次のような聖句を示してくれました。

●伝道の書 9：5，6

「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさえも、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない」。

●ヨハネによる福音書 11：11－13

「それからまた、彼らに言われた、『わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く』。すると弟子たちは言った、『主よ、眠っているのですしたら、助かるでしょう』。イエスはラザロが死んだことを言

われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った」。

●コリント人への第2の手紙 15：50－54

「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである」。

●テサロニケ人への第1の手紙 4：13

「兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、

キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互いに慰め合いなさい」。

クリスチャンは死んだらすぐ昇天すると、何の疑いも矛盾も感じないで信じきっていた私は、死後の状態について、初めてはっきりと次の事を理解しました。

1. 死者は無意識である。
2. 感情がない。愛も憎しみもない。
3. 死後すぐ報いを受けるのではない。
4. 生ける者の生活に関わることはない。
5. 死は眠りの状態である。
6. 終わりのラッパの鳴り響く時に、復活するのである。
7. それはキリスト再臨の時である。

姑は、戦前から中田<sup>うご</sup>羽後先生のホーリネス信仰を持ち、目に見える、実際のキリストの再臨を信じていましたので、再臨について今まで私たちといつも意見が合いませんでした。しかし、叔父は、キリストはすべての人に見えるように、聞こえるように再臨なさるのだということを聖句によって教えてくれ

ました。

●ヨハネの黙示録 1：7

「見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎみるであろう」。

●マタイ 24：27

「ちょうど、いなづまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」。

その他多くの聖句によって、イエス様はいつも心に宿っておられるから、目に見える形で再臨なさるのではないという、今までの再臨に対するあやふやな理解がいかに間違っていたかを教えられました。この事に関しては、姑の勝ちでした。彼女も喜んで「これがほんとの教会だ、進みなさい」と励ましてくれました。

安息日については、更に驚きでした。人類に与えられた祝福の日として、第7日目安息日が定められており、イエス様も弟子たちも、この日を守ったことが聖書から証明されました。金曜日に十字架に掛けられて死なれたイエス様が墓に納められた様子を見届けて後、女たちは家に帰り、香料と香油を用意しました。「それからおきてに従って、安息日を休んだ」ルカ 23：56。この聖句は、私にとって決定的でした。

「7日のうち1日、遊ぶことも忘れて  
神様の家に来て、聖書学ぶ楽しさ

イエス様もこの日を、お守りなされた  
私もこの日を、守りましょう」

と小さい時から日曜学校で歌ってきましたが、イエス様、そして弟子たちが清く守った礼拝日というのは週の第7日、すなわち土曜日だったのです。イエス様がよみがえられた日曜日に礼拝を変更するよという命令は聖書のどこにも見出すことができません。日曜日というのは、太陽崇拜の日であり、なぜ、この日が世界的に礼拝日として崇められるようになったか、その由来も詳しく学び、いよいよ驚きに満たされました。

しかも、ローマ教会による神の不変の「時と律法を変えようと望む」(ダニエル7：25) 企ても、預言から知りました。安息日を変え、十戒も変えてきたローマ教会の習慣に、知らずにとらわれていたのだということに目が覚めました。

また、神学校でも、「お化け屋敷だから、学ぶ必要はない」と言われて開いたこともなかったダニエル書と黙示録の研究は驚異的でした。世界の諸事件が聖書の預言の通りに起こっていること、又、世界の大帝国の興亡の歴史は、聖書の預言の確実性を実証している事を知らされて驚きました。過去の歴史は預言の通りに起こったばかりでなく、現在起こっていることも、また将来起こることも詳しく預言されているというのです。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」(アモス書3：7)のです。

叔父が「キリストの再臨の前の、真の教会をどのように見分けることができるか、聖書に教えられているんですよ」と

言って、預言の解き明かしをしてくださいました。「神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒」（ヨハネの黙示録 14：12）こそ真の教会であるというのです。

これらの教えは、本当だろうかと疑いましたが、聖書に書かれている通りのことなので、否定することができません。あまり不思議で、叔父の聖書と私の聖書は同じだろうかと比べて見ましたが、聖書は同じでした。私は伝道者でありながら、何と多くのことを見逃してきたのだらうと恥じ入りました。

感動のあまり、教派の違いなど気にせず、さっそく叔父の案内役になって、佐敷村、知念村の小学校や公民館を借りて、夜の伝道集会が始められました。

その頃、珍しいスライドを見せながら語る聖書のお話、人々は興味を感じて会場いっぱいになりました。また、昼は、親戚、友人、知人、沖縄キリスト教団信者の家々を訪問して、ピクチャーロールで聖書研究をしているうちに、はじめて聞かされた新しい真理の光は、首里、那覇、石川、遠く北部のクリスチャンを始め、未信者の間にも伝わり、<sup>りょうげん</sup>療原の火のように広がっていきました。

ある日、那覇の教団信徒の家に招かれて、聖書研究をしていたところへ、教団の長老格の牧師が見えて、屋比久に「あなたは信者泥棒だ。どうして未信者のところにいかないで、うちの信者を迷わすのか」と責めました。すると、その中の1人が、「先生、信仰は自由です。私たちがお願いして聖書研究をしていたのですから、泥棒ではありません」ときっぱり答えたので、返す言葉もなく帰られました。

それからまもなく、教団所属の池宮道子婦人伝道師が「これまで自分は、盲人の手引きだった」と教団本部に辞表を提出しました。

池宮先生は、セブンスデー・アドベンチスト教会の聖書理解は正しいと誰よりも真っ先に認め、はっきりと公言した方です。

続いて私も、戦後教団牧師となった父に逆らって、辞表を提出したところ、来るべきものが来たと、前々から不穏な雲行きを感じていた教団本部は、大揺れ。

さっそく全島の牧師を那覇に招集して、協議の結果、池宮姉の辞表はそのまま受け入れ、津嘉山は異端の張本人として除名され、翌日の新聞に公表されました。

「津嘉山澄子婦人伝道師、沖縄キリスト教団より除名され、セブンスデー・アドベンチスト教会に転向。セブンスデー・アドベンチスト教会とは：

- ①日曜日の代わりに土曜日に礼拝。
- ②豚肉を食べない。
- ③お茶、コーヒーを飲まない。以上」

この報道で、全沖縄に、セブンスデー・アドベンチスト教会が紹介されたのですが、豚肉を好み、お茶、コーヒーに親んでいる沖縄の人々に、異様な印象を与え、また、クリスチャン仲間からは、異端視され、敬遠されました。

「津嘉山は、恐ろしい伝染病だから、一切交際してはならない。道で会っても挨拶しないように」と有力な牧師さんがおっしゃったそうです。しかし、またある牧師さんは「敵をも愛せよというのが聖書の教えでしょう。津嘉山さんは私の同僚ですから、友人として今後も付き合っていきます」と言われ、いろいろ取り沙汰されました。

長年、慣れ親しんできた教会を離れ、信者1人もいない、新しい教会に移ることは、至難なことでした。ことのほか、期待を裏切られて、嘆き悲しんでいる父の姿は、見るに忍びないほどでした。全牧師の集まっている席上で、年老いた父は、涙ながらに深々と頭を下げたお詫びしたそうです。

そこに居合わせた友人が私に言いました。「あなたは、十戒の4条を守って、5条を犯している」と。

しかし、どんなに辛くても、1度受けた真理の光を拒むことはできませんでした。

1951年4月、米国留学の推薦を受けていた琉球大学の学生で、ゼンセン牧師の通訳をしていた、阿嘉広英兄と民政府翻訳部に勤めていた長男、津嘉山薫がSDAでは第1回留学生として、日本三育学院神学部に入りました。学院の先生方は、米国統治下の沖縄から学生が送られてくるが、日本語は話せるだろうか、勉強についていけるだろうかと心配なさったそうです。しかし、2人とも達筆で漢字力抜群、国語ばかりでなく英語の成績も良かったので、後に続く留学生の模範となりました。

その後毎年、男女学生が神学部、教育学部、看護学院に送られ、将来の沖縄伝道の指導者が着実に育てられていったのです。



## SDA教会婦人伝道師として

.....

1951年5月、沖縄におけるSDAの初穂として、私がゼンセン牧師よりバプテスマを受けました。その後、思いもよらず三育学院神学部で、1学期間だけ特別生として訓練を受け、SDA婦人伝道師として任命されました。



ゼンセン先生よりバプテスマを受ける  
1951年5月26日

## 首里教会

.....

同年10月には、首里赤平の高台、<sup>とらじやま</sup>虎路山に堂々とした大きな教会堂が建てられ、宣教師夫妻と外国人2人と私の5名の教会組織がなされました。ひと握りの信者しかいないのに、こんなに大きな教会堂を建てるとは、不思議な人たちだと思いましたが、ゼンセン先生は、狭いくらいだと、大きな夢を持っておられました。

同年、11月には、第2回目のバプテスマ式を行いました。沖縄初期の伝道に尽力された、小倉指郎牧師によって、7名が受浸。そのほとんどが、キリスト教団からの転向者でした。その後も働きは順調に進み、日本伝道部会から、西浦先生、横溝<sup>えん</sup>先生方が派遣され、預言の声聖書通信講座も沖縄で開始されました。2年後には、阿嘉広英牧師が、現地出身の第一号の働き人となりました。



丘にそびえ立つ首里教会  
叔父の屋比久、私、横溝先生

## 佐敷教会

.....

1953年1月には、叔父の故郷であり、私にもなつかしい思い出の地、佐敷村の小高い丘の上に、米軍払下げのかまぼこ型の建物（コンセット）を改造した、佐敷教会が2つ目の教会として誕生しました。後にこの建物が沖縄で初めての教会小学校となりました。

安息日になると、多くの年寄りたちがこの丘に登ってきて子供たちと楽しく過ごしました。「屋根より月は漏れ入るとも、とびらは雨をうるおすとも」このコンセット教会は、祝福に満ちた「み神のエルサレム」となりました。

## 石川教会

.....

沖縄の中部、石川でも熱心な求道者が与えられていました。叔父のハワイでの友人、石川牛寿さんに、その家族、親戚に福音を伝えるよう頼まれて、聖書研究が早くから始まっていました。

石川隆蔵さん、石川武雄さんは、地域社会でも尊敬されていた方々だったので、その影響力は大きく、石川教会が組織される時には、すでに30名以上のグループができていました。私もこの地で長年ご奉仕する特権に預かりました。

## 北部伝道

.....

沖縄北部の伝道は、実に不思議な方法で進展していききました。昔と変わらず今も働き給う聖霊の証しです。

実は、1948年頃から、辺土名の伊礼医院で熱心なクリスチャンが集まって家庭集会を始めており、金城憲盛さん、比嘉盛仁先生、私（SDAになる以前）などが出かけてお手伝いしていました。

そこに、宮里春さん、石川信先生方もおられたのです。

私は、屋比久がハワイから来てからは、セブンスデー・アドベンチストの聖書理解の深さに魅せられ、教団の信徒友人に、

「各時代の争闘」、「創世時代と父祖の生活」など、証しの書を貸して読ませていました。

春さんは、み言葉に飢え渴き、夜の更けるのも忘れて聖書や証しの書に熱中したようです。次第に教団からは離れ、宮里春さんを中心に、橋口弘さん、平良トミさん、山川ヨシさん、そして、喜如嘉の姉妹たちが加わり、聖書研究会は、牧者のないままに増え続けていきました。

これ以上は、自分たちの手におえないと感じ、1952年の夏、トラックのような公営バスを何時間もかけて乗り継ぎながら、山原から首里まで出向き、ゼンセン先生にこの集会の責任を取って下さるなら、私たちはセブンスデー・アドベンチスト教会に属しますとお話したところ、喜んで引き受けて下さいました。

そして、卒業したての阿嘉先生を始め、西浦先生、横溝先生、私の4人が2週間交代で北部伝道に携わることになったのです。

また、別のグループは、金武保養院の聖書研究会を中心に育てていました。平良安子さん、宮城ふじさん、国吉千恵子さんらが退院して、各々の部落に帰り、信徒伝道者として熱心に働きを続けました。

このように、各地で収穫のために備えられていた魂が束になって、三天使の使命を待っていたのです。そして、私たち働き人が送られて刈り取られていきました。

金城ひろさんの住宅を解放していただいて始まった、奥間集会所を拠点として、遠近多くの部落で、聖書研究会が次々に開かれました。

宜<sup>ぎ</sup>名<sup>な</sup>真<sup>ま</sup>の集会を終えて、次は奥に1晩泊まりで行くのですが、今のようにバスが通らないばかりか、道さえもありません。険しい坂道を登ったり下りたり、草をかき分けつつ進む山道でした。

「山路こえて、一人行けど、  
主の手にすがれる、身は安けし

松の嵐 谷の流れ  
み使いの歌も かくやありなん」

ある日、小学生だったすが子を連れて行きました。野いちごを摘みながら、ピクニック気分で出発しましたが、途中から疲れきって座り込んでしまうのです。おんぶするには大きすぎるので、しかったり、すかしたりして歩かせていたら、「こんな山奥に住んでいる人間もいるんだねー」とあきれ顔。

最初は奥の部落から、赤ちゃんを背負ったお母さんと金城タカさんたちが、傘もなく雨に濡れながら、山越えをして集会に来ておられたのです。その熱心な姿に打たれて、本土からこられた先生方も、こちらから訪問するようになったのでした。タカさんのお家について、薪のお風呂に入れていただくときの気持ちよさ。また、夕食のウムクジ天ぷらのおいしかったこと。ああ、ほんとに楽しい伝道でした。

教会が盛んになるにつれて、安息日問題が大きくなってきました。まず、2人の高校生が安息日を守るようになりました。学校から度々注意を受けていましたが、「人に従うより神に従うべき」だという固い信仰を持って教会に出席し続けました。多くの中学生も加わったので、騒ぎは大きくなり、ついに新聞に載せられ、沖縄じゅうに報道されました。

「社会秩序の紊<sup>びらん</sup>乱者、学校教育の破壊者、セブンスデー・アドベンチスト教会を打倒せよ」と…。

非難攻撃の真っ最中、まずは、学校当局に当たって理解していただきたいと思い、辺土名高校を訪れました。祈りつつ校長室のドアを開けてびっくり。以前県庁の社会教育課で共に働いた昔馴染みの同僚が校長だったのです。「問題の教会は、君の教会だったのか。困ったなあ」と頭を抱えておられました。

「先生、この2人は優秀な生徒だそうですね。」「それで困っているんだよ。」

「先生、優秀な生徒なら、1日くらい休んで教会に出席しても、学力は低下しませんよ。許してやって下さい。」

「でも、みんなが真似たら困るからね。」

「よいことは真似てもいいじゃないですか。安息日というのは、聖書の大切な教えなのです。」

「それでは、僕たちが困るよ。仕事がなくなるじゃないか。」

「先生方も、みな土曜日は教会にいらして下さい。」と笑いながら話し、結局黙認ということになったのでしょうか。

2人は無事に安息日を守り続け、三育学院の看護科に進学しました。

当時、国頭村の教育委員長をしておられた宮城定蔵先生は温厚篤実な方でした。こんなに世間を騒がしている教会はいったい何を教えているのだろうと、実際教会にこられて調べました。そして聖書の教えに納得なさって、引退してからはご自分も教会に出席なさり、長年教会長老として奉仕して下さいました。

また村の婦人会長として活躍なさっていた奥様のカナ先生も、公立の教師をしておられた娘さんたちも、家族揃ってセブンスデー・アドベンチストになられたのです。

このように、悪宣伝され、迫害されても、少しの妥協も許さない、純粋な信仰に生きた信徒によって、「セブンスデー・アドベンチスト」というそれまで聞きなれない教会名が沖縄の隅々にまで行き渡るようになりました。

## 教育、医療伝道

.....

そして、更に子供を持つ信徒の強い要望によって、三育小中学校が緊急に設立されていく道が開かれていきました。公立の教師を辞めて献身なさった大城トヨ先生を中心に、安息日を守る5日制の教会学校が与えられた時の喜びは忘れることができません。

続いて、首里教会内に三育中学校ができ、その後、確実に成長して、信徒子弟の教育の重責を果たしていきました。

また一方では、当時人々から最も必要を訴えられていた医療機関、アドベンチスト・メディカル・センターの誕生は、多くの県民から喜ばれ、感謝されました。

現在は西原に移転しましたが、最初は上之屋うえのやに建てられていました。ゼンセン先生は、この高台が気に入り、ぜひこの土地を手に入れたいと思いましたが、那覇市街を一望に見下ろす一等地でしたから、相当難しいだろうと予想されました。



そこは戦前、木がこんもりと茂った美しい静かな丘で、白山病院という結核療養所が立っていたところです。院長は、喜如嘉出身の医師、金城清松先生で、お嬢さんの常子さんは、一高女時代聖女会での私の教え子、またお姉さんの清子さんとも親しくお付き合いしていましたので、土地購入の件について相談してみました。

清子さんは「個人の金もうけをする方たちには売りたいありません。父の意志を継いで奉仕的なお仕事をして下さる方に使っていただきたい」とのことでした。私たちが病院の計画を説明しますと、快く売って下さいました。

私ははじめ、こんなバス停から遠い辺りな場所に患者が来るだろうかと心配しましたが、ゼンセン先生は、最も理想的な場所だととても喜んでいました。

当時は、ほとんどアメリカ人の医者が診療に当たっていたので、誰言うとはなしに「アメリカ病院」と名づけられ、沖縄じゅうに知れ渡り、親しまれました。医者、看護婦さんたちは、遠近の島々にも無料診療などによく出かけ、奉仕して下さいました。収穫運動に行っても、アメリカ病院からだといえ、みな喜んで献金して下さいました。

## 八重山伝道

.....

沖縄南部からはじまって、中部、北部、そして離島へと、教会は次々建てられていきました。宮古伝道の拠点を築いた沖縄部会は、次の目標として八重山を考えました。そこで、1965年初頭、津嘉山、金城両家の家族伝道チーム（講師 津嘉山繁牧師、讃美歌指導と司会 金城重博牧師、婦人伝道師 津嘉山澄子、オルガニスト 津嘉山敏枝、受付庶務 金城めぐみ）が生まれ、そのために任命されたので、さっそく伝道計画を立てました。

八重山は、SDAにとって、まったくの処女地。文書伝道者の忠実な種まきはなされていたものの、信者1人もいない土地で、初めての講演会。一抹の不安もありました。

まず、繁と重博が、八重山についていろいろな角度から調べ検討したところ、たちまち頭を抱えてしまいました。講演会は、その年の秋ということですが、気象庁の発表によると、過去の統計からはっきりしていることは、今年はかつてないほど

の台風の当たり年だということです。これは、2,3ヶ月に及ぶ長期の講演会を計画している私たちにとって、頭の痛い予報でした。

それに加えて、もう1つの致命的ともいえる大問題。それは、その秋に石垣市長選挙があるということです。小さい島国、石垣島のこと、市長選挙ともなれば、島じゅうが選挙の渦の中に巻き込まれ、1票、1票にしのごを削り、自警団まで組織され、部落への人々の出入りもチェックされ、夜も寝ずの番だということです。

そのように、島が真二つに分かれ争いあう中で、両側の人々が、夜の講演会に出てきて共にお話を聞き、讃美歌を歌うことができるでしょうか。また、そんな心のゆとりがあるのでしょうか。

どう考えても、ノーと結論を出さざるを得ません。しかし、部会の計画としては、今年を逃しては、後のチャンスは難しいということでした。私たちは、乗り越えることは不可能と思われる壁の前で、ただ神様、神様と呼ぶことしかできませんでした。そして、何と馬鹿なことをと思われるかもしれませんが、ゴーサインを出して乗り込むことにしました。

八重山で唯一の頼みは、金城初枝さんの父上、喜舎場さんを紹介して頂いたことでした。喜舎場さんは、私たちの伝道計画を喜んで、さっそく講演会場と、私どもの宿も捜して下さいました。

根城ができたので、いよいよ出発。未知の土地八重山へ足を

下ろしたときは、感無量一。神のお導きを心から祈りました。

喜舎場さんに案内されて、宿に落ちついてから、まず会場を見に行きました。ここは、前に映画館だったのですが、閉鎖され、長年空き家のままほったらかされ、中は荒れ放題。まるでお化け屋敷。最初はがっかりしましたが、しかし、街の中心であること、家賃がただ、この好条件で借りることにしました。

男性組は、さっそく木材を買い整え、のこぎりをひき、ハンマーを振り上げて、内装、修繕に猛活躍。女性はエプロンがけで、大掃除を始めました。幸い宮古教会からも、数名の姉妹方が講演会を手伝うため、海を越えて来て下さいました。このような時に、同信の友のありがたさを心から感謝しました。

幾日か過ぎ、修理も大掃除も終了。新しいカーテンが掛けられ、生まれ変わった明るい会場には、神の祝福が満ち溢れているようで、一同感謝の祈りをささげ、皆さんの労をねぎらいました。

さて、準備万端整い、戦闘開始。男性は市内の大通りを宣伝カーで「希望への招待講演会へ、どうぞおいでください」と呼びかけながら、ビラ配り。女性は戸別訪問しながら、ビラ配り。いよいよ予定通り、講演会は始まりました。

1週間、2週間、1ヶ月、2ヶ月・・・講演会は続きます。ついに3ヶ月連続講演会の後、最初のバプテスマがあり、その後、1ヶ月の継続聖書研究会をして、第2回目のバプテスマで、合計21名の信徒が生まれ、1965年12月に八重山教会が組織されました。

いったいあの台風はどうなったのでしょうか。気象庁長期予報は完全に外れ、その年は1度も台風がきませんでした。ただ雨がよく降りました。

テレビもない時代ですから、雨の降る寂しい夜は、大人も子供も会場に押しかけてきました。また、その雨のおかげで、講演会に出席した奥さんを迎えにやってきたご主人が、仕方なく会場に誘いこまれて講演を聞き、更に「2万人に1人」という禁煙映画を見て、帰りには吸いかけのたばこをドブに投げ捨て、それ以来、講演会の虜となり、ついにバプテスマまで導かれました。

では、あの最も恐れた市長選挙は？

無投票当選！！



津嘉山伝道チーム、八重山にて

「神のなされることはみなその時にかなって美しい」

このように、特に産みの苦しみをしつつ生まれ育った一つ一つの教会、そして、お一人おひとりの信徒は、自分の子供のように思えます。

小さい頃、すが子が私に言いました。「すが子と信者と、どっ

ちがかわいいの」と。この鋭い質問に母親として、何と答えたのかはっきり覚えていませんが、正直言って、どっちもかわいいのです。教会の方とは、家族親戚同様の、深いお交わりをさせていただきました。



すがい7才

あの方、この方の事を思い出して書き綴れば、もういくら紙面があっても足りないくらい書く事ができます。しかし、そうもいきませんので、ここでは、八重山の小波本正美さんについてだけ特別に記しておきましょう。

講演会が始まってしばらくしたある晩、いつものように私が受付に立っていると、1人の女の子が入ってきました。遠慮がちに受付名簿に名前を書きたいと言うので「子供さんはそのまま入っていいですよ」と言うと、「私は子供ではありません」と答えられたので、ハッとしてよく見ると、背丈こそ小さいけどしっかりした顔立ちの娘さんでした。「ごめんなさいね」としきりに謝りつつ、ノートに書いていただいた名前が小波本正美。

これがはじめての出会いでした。

正美さんの入信当時の思い出の記を、八重山教会創立25周年記念誌から一部転載させていただきます。

「9月から11月の3ヶ月間、台風の当たり年で毎日雨の降る悪い天気にもかかわらず、繁先生の熱心なお話を聞きに多くの方が集まっていました。私は連れていってくれるお友達の都合で、月曜日だけ出席しました。

そんなある日、津嘉山澄子先生が私の家を訪問して下さい、天国のお話をして下さいました。初めて聞く天国。そこには悲しみも死も病気もないという天国に強く心を動かされました。そして、先生に『天国に行くためにはどうすればいいですか。私でも行けますか』と尋ねました。先生は『イエス様を信じなさい。そうすれば誰でも行けますよ』と優しい声で答えてくれました。私をもっとイエス様や天国のお話を聞かせて下さいとお願いすると、先生は喜んで承諾して下さいました。そして翌日も金城重博先生とお2人でおいでになり祖母を説得して下さいました。

当時私は、祖母の許しがなければ、1歩も外に出してもらえなかったからです。先生が、毎日会場まで送り迎えして下さい、私が神様のお話を聞いて幸せになれるようにしてあげたいとの先生方の言葉に祖母も安心し、また喜んだようでした。先生方がおいでにならなかつたら、私はSDA教会員になれなかったでしょう。すべて神様が導いて下さった事を感謝します。」

障害を持ちながら、正美さんは第1回目にバプテスマを受け、今までとまったく変わった生き方をしました。

人目をはばかり家から1歩も出ない生活でしたが、信仰を持ってからは、1人で聖書を抱えて道を歩き汗をふきふき元気よく、毎週教会に出席するようになりました。

引っ込み思案だった性質も直すように自分で努力し、教会でも人前に出て、書記報告をしたり、証しをしたりしていつもにこにこと明るく奉仕をして下さいました。

あれから30年たって、ついこの前、それはそれはうれしいお便りと新聞記事をいただいたのです。

**“ 障害を克服、模範的職業人、  
初の労働大臣表彰に小波本さん ”**

「石垣市の宮良医院に勤務する小波本正美さん（48）が、優良勤労障害者として労働大臣表彰を受けた。

八重山管内から労働大臣の表彰に輝いたのは小波本さんが初めて。

労働大臣表彰は、勤労障害者の努力を称えるとともにこれを広く周知し、障害者雇用の促進と安定を図るのが目的。

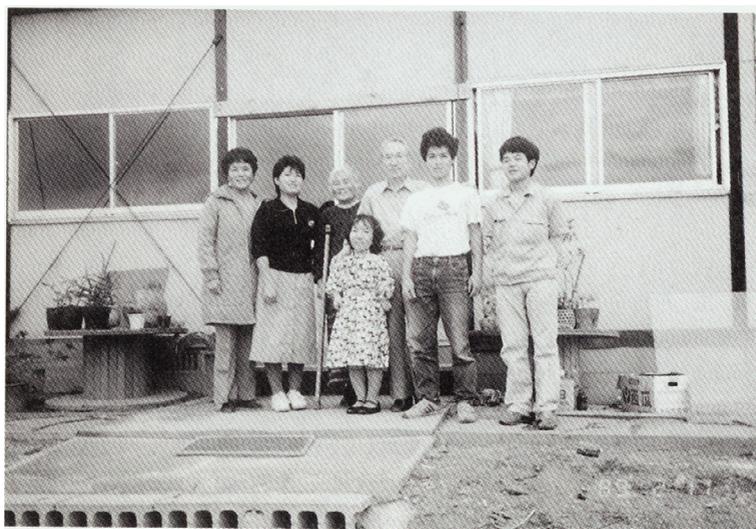
表彰基準は、就職者で、その障害を克服し模範的な職業人としての業績と、職場における同僚からも敬愛され、同一企業での勤続年数が、原則として10年以上の者、小波本さんは、同医院に事務職員として就職し、今日まで14年10ヶ月にわたり模範的職業人として業務に従事した。」

「先生ご家族との出会いによって信仰生活に入ってもう30年。その間、いろいろな事がありました。でも神様はすべてを益として下さるお方です。苦しみだけでなく喜びをも与えて下さいました。

信仰を持ったおかげで私は神様の栄光をあらわすためにこの体が与えられている事を知りました。神様が与えて下さったこの小さな手で仕事をして神様に感謝の献金をささげたいという気持ちで仕事につきました。

神様の導きと守りと祝福のうちに14年10ヶ月同じ仕事をしているという事で、この度すばらしい賞を頂き感謝しています。先生方ご家族との出会いがなかったらこの喜びの日はなかったといっても過言ではないでしょう。ほんとにありがとうございました。これからも神様と共に歩いて生命ある限り神様のご栄光をあらわす生き方をしたいと思っています。」

暗闇の人生に光を見出した方々の証しは尽きる事はありません。



小波本正美さんと



## 引退と老人会組織

---

光をさし示す伝道のお仕事ほど尊いものはないと心から思います。父がどんなに貧しくても塩をなめてでも伝道者になってくれと口癖のように言っていましたが、年を重ねる毎に父の心が分かるような気がします。

十分に働いたとは言えませんが、S D A 婦人伝道師として18年間働き一応引退の身となりました。

その頃だったと思いますが、当時の青年会が非常に活発に活躍していました。本島内だけでなく、離島までも出かけて伝道していました。

その旺盛な伝道心に心打たれ、

「よーし、青年たちに見習って私たち熟年組も何か一踏ん張りしようじゃないか。」と話し合いました。みんな大賛成！早速会を作ることになりました。しかし名前がなかなか決まらない。

「S D A 老人会ではいかにも老人臭い。」

「コトブキ寿会はどう？」

「ありふれているね。」

「聖書の中からドルカス会の様な意味深いよい名前をつけたいね。」と私が言うと、当真先生が「テモテのおばあさんの名前、ロイスをもらってロイス会はどう？」とおっしゃいました。テモテの様な立派な青年伝道者を育てたロイスです。

「それは良い」とみんな大賛成。

本部は那覇教会において沖縄全教会に支部を置くことになりました。

第1代ロイス会長は誰にしようか。「津嘉山先生、澄子先生」。おしゃべりの津嘉山、言い出した責任をとって皆さんのご厚意を感謝して引き受けました。

今は耳も遠くなり、体も小さくなってきましたが、その頃



SDA ロイス会発足

はまだ60代、意気盛んで物おじしない男みたいな私でしたから、新しい仕事を与えられて喜びに満たされて立ち上がりました。

各教会で支部長を選出していただき、役員も決まり、日本SDA教団で初めての老人組織、ロイス会がこの沖縄で誕生したのです。沖縄こそロイス会発足の地に最もふさわしいところです。

今や日本は世界一の長寿国になりました。そして沖縄は日本一の長寿県です。しかし、長寿長寿と平均寿命の長さを喜んでばかりはおられません。高齢化社会の問題が深刻になり始めています。沖縄の老人病院、老人ホームは増築に次ぐ増築、どこもかしこも満員です。

私は年賀状にこの言葉を書いた事があります。

「長寿は祝福である。しかし、救いを伴わない長寿は、恥辱と苦難の一生であって、決して幸福とは言えない。キリストによる罪の許しと復活の希望が与えられ、永遠の命の歓喜を知るに至って初めて長寿の祝福は満ち足りる。」元東大総長、矢内原先生の言葉です。

罪の許しと品性の完成、永遠の命の希望が与えられ、その上健康の諸原則をしっかりと学ぶ機会を得たSDAロイス会員にこそ長寿の真の祝福は満ち溢れることでしょう。

長寿をもてあまして苦しんでいる人があるかも知れません。福音を伝えましょう。これがロイス会を作った最初の目的でした。

た。

もう今は、会員も若返って、70代になってもおばあさんの名前であるロイス会員と呼ばれるのはふさわしくない人が多いとか……。結構なことです。

若々しい名前に変えて、引退後の第2の人生を神の栄光のために捧げ、思いっきり働いて下さい。ヨシュアに言われた主の言葉は、今も私たちに向かって語られています。

「あなたは年が進んで老いたが、取るべき地はなお多く残っている」と。

あんなに歩き回った私の足も膝も近頃はだいぶ弱り、静かに座って昔を思うことが多くなりました。開拓当時から沖縄伝道の過去を振り返ってみると、SDAの初期ほど他教会、また一般社会から非難攻撃、迫害を受けてきた教会は沖縄キリスト教史に例がないと思います。

そんな中で牧師、教師、文書伝道者、医師、看護婦、検査技師、栄養士、信徒伝道者など、有能な働き人が次々と育てられて教会を力強く支えていきました。

日本じゅうで1教区、1県に病院、小学校、中学校、20余の教会や集会所を抱えているところは、沖縄以外にないでしょう。戦禍にたたかれた悲劇の島沖縄に、神様は特別な憐れみを注いで下さり、47年前にはSDAの信徒1人もいなかった島に、現在2千名近い同信の兄弟姉妹を与えて下さったのです。主の御名はほむべきかなと賛美せずにはおられません。

人生ちょうど半ばに、セブンスデー・アドベンチストの信仰を持つという大きな転換をしたため「子供たちの教育費も心配するな。財産も分けてあげよう」と言って私を可愛がってくれた父を怒らせ4人の子供を三育学院に送った時も、何の援助ももらうことはできませんでした。

しかし、父は私に一番大事な遺産をしっかりと残してくれました。それは神様を愛し、信頼する心でした。ごく幼い時から讚美歌を教えられ、流行歌や琉歌でさえも歌わせませんでした。

まことの神様、ただ1人  
みなさん早く信じましょう。

まことの神様、活ける神  
みなさん早く信じましょう。

まことの神様、愛の神  
みなさん早く信じましょう。

まことの神様、造り主  
みなさん早く信じましょう。

と歌わせ、まことの神様の観念と信仰心を植え付けてくれました。

三つ子の魂百までと言いますが、これこそ百年どころか、永遠に続くまことに尊い遺産です。父はたくさんの不動産を持っておりましたが、それを分けてくれなかったことを口惜しいとは思いません。

私の友人に心のとてもきれいな人がいましたが、「あなたは神様を信じることができていいね。うらやましい。私も信じたいけど、どうしても信じることができないのよ」と悩んでいました。信仰というのは聖霊の助けによる特別な賜物なのでしょうか。幼い時から聖書に親しみ、救いにいたる知恵を世の学問以上に大切にするように教えてくれた父に心から感謝しています。

「はかり縄はわがために楽しき地におちたり、  
うべ我よき<sup>ゆずり</sup>嗣業をえたるかな」

(詩篇 16 : 6 文語体)

この「よき<sup>ゆずり</sup>嗣業」が東恩納のおじいさん、津嘉山のおばあさんから私と朝弘、そして4人の子供たちへ、さらに10人の孫たちと8人のひ孫へと次々と受け継がれていくのを見ることができた私はほんとに幸せです。

1世紀近くも生かされた甲斐がありました。婿たち、嫁たちもそれこそ一族郎党そろってみな神様を信じ、さらにセブンスデー・アドベンチストであるという家庭はそう多くはないでしょう。

この幸せを得させられたのは、「あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない」(申命記9:5)と記されています。子々孫々神の命令を忘れず、これに従うならば、神様は先祖に誓われた契約に従って私たちに幸いを与えて下さるという証しのためです。

「あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、また牛や羊

がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう」（申命記8：12, 14）。安泰になった時「主を忘れることがないように慎まなければならない」とモーセは幾たびも、民に訴えました。

津嘉山家はお金に縁のない家族ですから、大金持ちになる子はいないでしょうが、「自分の力と自分の手の働き」で幸いを得られると思ひ違いし神様をないがしろにする危険は大いにあります。「あなたの仕える者を今日選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」（ヨシュア24：15）。ヨシュアのように私たち家族も、みんなで神様に忠実に仕える道を選びましょうね。

天国での再会の喜びを思うともう胸がわくわくします。

地上での別離はしばしの別れ、死も病も、涙もない、新天新地が目の前に迫っているのですから毎日希望に溢れています。

## つれづれなるままに

.....



手の甲を なでつつ思う  
ありし日の 老いたる<sup>はは</sup>姑よ  
我も老いたり

●「シミヤ シッチ、ムノー  
シラン（墨は知って、物は知らない—知識はあるけれど知恵がな

い)」「家庭教育がなっていない」と姑にさんざんくさされれば「うちの家庭ではそんな教育はしませんでした」と言い返し、負けて小さくなるような私ではありませんでした。

しかし、姑の上品な着こなし、礼儀正しい、洗練された立ち居振る舞い、言葉遣い、首里のウドウン・トゥンチ（御殿殿内）の奥ゆかしい雰囲気には、なんとも言えない魅力を感じていました。いくら反抗してみても、いいものはいいですね。

姑の美しさ、良さがこの年になってしみじみ思われます。神様は母親に早く別れ、がさつに育った私を天の王族にふさわしい人間にするためにあのような結婚をさせて下さったと思うのです。

朝弘は真心から私を愛し、単刀直入にいろいろ注意してくれました。

「言葉を出す前には、よく考えなさいよ。君のあっさりした性質はとてもいいが、あまりはっきり物を言い過ぎるとゆかしさがなくなる。喜怒哀楽も程々に。あまり表現し過ぎると粗野になるからね」とこのように注意してくれた人は夫以外にいません。姑の意地悪に聞こえた忠告ももっと素直に聞いて実行しておれば、私は更に洗練された働き人になれたでしょうに。

「石川信先生や、宮城美智子先生みたいに、もう少ししとやかな婦人伝道師になりたい」と私が言ったら、「あらっ、津嘉山先生がしとやかになったら滑稽よ」と笑われました。しかし、これでいいとは思っていません。人はなかなか成長しないものです。

●小さい頃、近所にメーカーのウミー（前川のお姉さん）という女の方がいて、祝い事、催し物がある度に台所のお手伝いに来てくれました。その方の片づけの手際良さ、手早さ、見事なものでした。洗い物が山積みされているほどやりがいがあった楽しいというのです。子供心にもこのように仕事ができる人になりたいなあと憧れたものです。

●福岡から私を沖縄に引き戻した伊東牧師の奥様の模範による教えは、この年になっても印象深く残っています。台所がいつもきれいで、几帳面な方でした。夜寝る前には、台所はきちんと片付け、朝起きたらすっきりした気持ちで仕事が始められるようにと教えてくれました。今でも床に就く前に台所をひと回りする癖がついています。

●ロサンゼルスで老人ホームの管理人をしていた娘家族を訪問した時のことです。もう20年も昔のことですけど、昼食の後、私が皿洗いをしていました。すると日本から来られたあるご婦人が、「年寄りに皿洗いはさせない方がいいですよ。汚いから」と話しているのが聞こえました。「聞こえよがしに、ずいぶん失礼なことを言う人だ」とその時は憤慨しました。

しかし、94才になった今も家族の皿洗いを引き受けて毎日洗っているのですが、あの時言われた「年寄りに皿洗いさせると汚い」という言葉がいつも耳に響くのです。

「そうだ、確かに年を取ると目もかすみ、指の力も弱って洗い方が汚くなる。さあ、きれいに洗いましょう。力を込めて、丁寧に」と毎日自分に言い聞かせ、手早くはできませんが、念を入れて一生懸命洗っています。不愉快に思われた言葉が今は

かえって励みになっているのですから不思議ですね。皿洗いと野菜洗いは、私の楽しい日課です。

●「ああ、長生きしてよかった」ということも多い反面、年を取るということは、やはり寂しいものです。同年輩の友人はほとんど亡くなってしまいました。また、お元気な方でも、家で静かに過ごしておられるらしく、訪ねてはきません。友も減り、耳も遠くなり、あんなに毎日来ていた手紙も途絶え、私あての電話もかかってこなくなりました。「チカン ミンクジラー、フーヌアン（聞こえないつんぼは幸せ者）」と言われてるように、確かに雑音が聞こえなくなって、悩みも重荷もなくなりました。しかし、悩みのないのが悩みなのです。贅沢な悩みですけど、これを老いの寂しさというのでしょうか。

この世とのつながりが次第に薄くなり、天のみ国が慕われ、「もう、歩きつかれたなあ。早く休ませて下さい」と神様にそっとお話することがあります。次の詩は私と同じ心境の老人が作ったものでしょうか、とても印象的でした。

## — 人生の秋に — 「最上のわざ」

ヘルマン・ホイヴェルス

この世の最上のわざは何？  
楽しい心で年をとり 働きたいけれども休み  
しゃべりたいけれども黙り  
失望しそうな時に希望し  
従順に平和に おのれの十字架をになう—

若者が元気一杯で神の道を歩むのを見ても ねたまず  
人のために働くよりも 謙虚に人の世話になり  
弱って もはや 人のために役立たずとも  
親切で柔和であること

老いの重荷は神の賜物  
古びた心に これで最後の磨きがかけられる  
まことの故郷へ行くために  
おのれをこの世につなぐくさを  
少しずつはずしていくのは  
真に偉い仕事

こうして何もできなくなれば  
それを謙虚に承諾するのだ  
神は最後に一番よい仕事を残して下さる  
それは祈りだ—

手は何もできないけれども  
最後まで合掌できる  
愛するすべての人の上に  
神の恵みを求めるために—  
すべてをなし終えたら 臨終の床に  
神の声を聞くだらう  
「来れ わが友よ われ汝を見捨てじ」と

●繁たちと福島旅行に行ったおりに、初めて短歌を作ってみました。90の手習いでは物になるかどうか分かりませんが、井深良子さんに添削していただきながらがんばりました。

こんな時、朝弘が生きていたらよき師になってくれたことでしょうに、残念です。

過ぎし日の 芭蕉の足跡 偲びつつ  
思いにふける 奥の細道

幾年も 会わぬ友の 訪ね来て  
楽しく語る 福島の旅

山々の かなたの空に 茜雲  
赤城山麓の 家路は遠し

ほの暗き 雲のかなたに 明けの星  
輝く見れば 希望沸きくる

霧雨に 打たれながらも 散りもせず  
桜の花は今盛りなり

見納めの 桜並木を 車窓より  
あかず眺めて 別れを惜しむ

花びらの ごとき四月の 雪積もる  
冬枯れしあじさいの 群れ立つ枝に

小春日の 山の木株に 憩いつつ  
雲なき空に み国を偲ぶ

梅雨明けの 明るき野路を 杖つきて  
野の花摘みつつ 一人楽しむ

木の間より 漏れる日差しを 浴びながら  
森の小鳥と 讚美歌うたう

漸くに 日の差したれば幾日も  
干しておきたる 衣類をたたむ

梅雨あがり 洗濯物を 干し終えて  
松の木陰に しばし憩えり

雨だれの 岩をもうがつを 思いつつ  
我も励まん 短歌の道を

馳せ終えて 夕日の如く 赤々と  
燃やし尽くさん 残れる命

刻一刻、沈みゆく太陽と、妙に美しく彩られる西の空を見て  
思います。

私は次第に弱っていきますが、私の側にいる人たち、私を遠くから近くから取り囲んで下さるたくさんの方たちが茜雲のように、明るく美しく輝いて、私の人生の夕暮れに光を添えて

下さいました。

「夕暮れになっても、光があるからである」。

ゼカリヤ 14 : 7

私の人生は波乱万丈ではありましたが、過去は感謝、現在は喜び、将来は希望に溢れています。

皆さん本当にありがとうございました。

## 話すのがだ～い好き

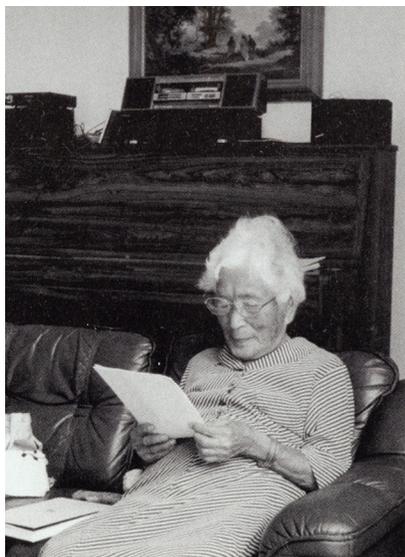


少年キャンプにて

## 旅行が だ～い好き



芭蕉記念館



**手紙が  
だ～い好き**

書くのも、読むのも



**海がだ～い好き**

## 食べるのがだ〜い好き



## 歌うのが だ〜い好き



カンターグワ (さわふじ)



**花が  
だ〜い好き**



長男、薫家族



子、孫に囲まれて



次男、繁夫妻と名護芳子



繁の長女、祥子家族



繁の長男、睦家族



長女、めぐみ家族



今帰仁の我が家を訪ねてくれた子供、孫、ひ孫たち



次女、すが子家族



朝日がいっぱいのアーチャンの部屋（左下）



津嘉山 遼



辻 頼人、礼人



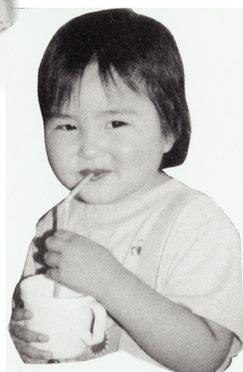
津嘉山 遥(はるか)



津嘉山 奏(かな)



津嘉山 愛



金城 瑠璃子

平成人に囲まれて幸せそうな明治人  
増えるひ孫

## あとがき

アーチャン（娘、優子が幼い時、おばーちゃんと言えないで、アーチャンと呼んだことから母の愛称となった。）に「自分史」を書くようにと前々からみんなで頼んでいたが、やっとその気になって、昔を思い出しつつ書いてくれ、出版することになった。

薫兄さんの前書きにもあるように、「明治、大正、昭和そして平成へと、4つもの激動の時代を一気に駆け抜けてきた」母、アーチャンの生涯の記録をワープロに打ちながら、その「白髪の前に起立」したい思いと、また胸にジーンと迫るものを感じた。こんなに簡略化してはもったいないと思ったが、時間がないので、このようにまとめることしかできなかった。作家の手にかかり、映画化されれば、実に面白い感動的な物語になったことだろうと思う。

アーチャンの文に出てくるカンターグラーの花というのは、どんな花なのか、沖縄植物事典を調べても分からなかった。不思議なことに、呉屋ますみさんが、ちょうど今、さわふじ祭りが西原町であるのだが、アーチャンが言っているカンターグラーとは、このさわふじのことではないかと話してくれた。それで夜に咲き、朝日が昇ると散るといふその花を見るために朝3時に起きて出かけて行った。さわふじこそ幼い日の思い出の花、カンターグラーであった。あたり一面に芳香が漂い、アーチャンが表現していた通りのピンクのカンターグラー（髪）をゆらしながらポトリポトリと落ちていく様は幻想的であった。

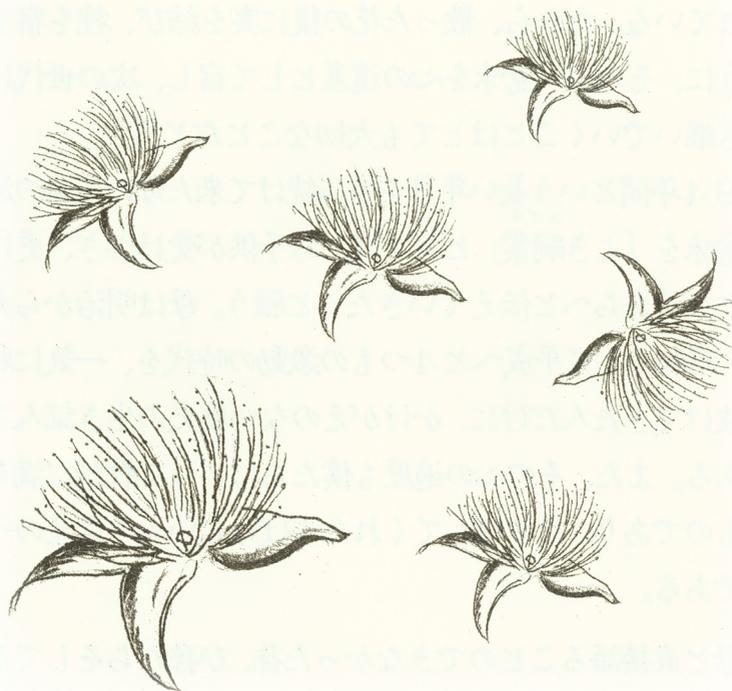
アーチャンは花に頬ずりして喜んだ。このさわふじは、樹齢500年の巨木、現在は天然記念物になっており、沖縄ではめったに見られない木で幻の花とも言われているようだ。

すべていいタイミングであった。

金城 重博

めぐみ

1997年7月31日



カンターグワ (さわふじ)

## 略歴

- 明治37年1月20日出生
- 大正12年3月 長崎県活水女子専門学校神学部卒業
- 大正13年4月 大阪市ランバス女学院保育部研究科卒業
- 大正13年4月 佐世保、福岡キリスト教婦人伝道師
- 昭和4年1月 メソジスト那覇中央教会婦人伝道師
- 昭和14年4月 沖縄県庁軍事援護課  
戦死軍人遺族家族婦人指導員
- 昭和21年11月 沖縄民政府文化部
- 昭和24年4月 沖縄キリスト教団婦人伝道師
- 昭和26年5月 SDA教会婦人伝道師  
18年間、69才まで働いて引退

